

324-257



風調章誨義

明治  
44. 8. 12  
内交

請飭請事  
三寶衆僧御布施之

風雨一乘妙法之花者首卷之而萬三五之舊蘭本寶顯也  
月惠光明而朗寐芝青天雷般之仲激不可測量者歎伏惟  
者日妙云人遷化之後慈淚未乾一回早到祈禱悲淚停焉提  
之資糧所謂奉而繪寶塔大曼荼羅一補奉請誦妙法蓮華經  
一亦方便五十二卷書畫一百廿卷十如是二千二百卷  
自我傷一萬二千卷題目一億二千萬遍奉書寫南無妙法蓮華經  
一万二千通奉造立率都派一本然大曼荼羅者為儀務未時

奉書寫之慶新法廣信卷之儀式持造善法華卷誰志也雖直  
二所三會之說相別專顯虛空一會之儀式九寶塔者妙法所  
在之宮殿諸佛恒居之心成薩埵末集之位所由輪本分全轉  
也之寶者案此塔蓋證明釋尊有三分身用塔身之二佛塔中  
佛付魂有在卷六難九是來末法導師顯提忍龍王之得益奉  
一末妙法之流通也化諸聖眾以領自述惠世之方軌又殊志  
則章同請方軌世尊者既四法勸始行是則此門派通之說相  
也以上過八恒沙之弘經云奉化寶光之地海因緣勸不細之  
總同顯釋言久成之遠本重三身即一應用顯慶點久連大  
悲懷量一念信解功德速轉展隨者之勝亦用六根不用  
之勝德引不輕大士之往事舉而強毒之逆緣顯達即是順  
回意現十種難思之神在時末法弘通之法是則奉心流通

大法也其要法也所謂題目五字元之發此妙法蓮華經之三特  
回轉之法特性海果分之內證可引兼喜之都名奉地甚深因發  
之是此奉言之存殊之改轉也多寶二佛志先此門意志二佛  
后一塔者境智不二之妙分力坐樹下之利益周通之相三佛三  
身之表德也佛果成之實也次奉心意者癡始覺顯不覺破迷  
佛云奉佛奉地難思之境智用無作三身之色心業之所靈空音示  
此六轉一三常案之用遠奉六顯三身一身之間受用也應用堅高  
三世刺蓋橫通十方以上行善之道通師者最初寶成之子子久志  
證得三喜薩佛果傳受之大士末法弘經之奉師之九世八奉奉  
者依正不二人法一特奉佛一如中奉奉具之奉奉奉也隨茲  
護國其為人者盡三奉就於一時一拜此像輩之證三善提也  
一念頓然頓證之秘法即身成佛之龜鏡也次此經者諸佛出世之

本像衆生成佛之直道也諸佛身相相應之修行此五百緣善  
根之善寫者法命久住之根源憶持不忘之大善也次題目云如三  
千之本心三身果滿之內證存正兩門之肝要先師秘通之存法之次  
證之存法過身之普門示現三身相過之三摩耶形之佛力法力合  
力可靈增且無疑若後云日外之人爾一乘可修之善業有爾一善善  
提覺花卷題目之字之勝業志錄之智田滿之定月七世師恩生  
文又母親疎懶之過且越音源法而自成妙因及以法界平等  
利益便寫三下之少鏡式警三身之尊開乃調調可請如行教曰

嘉慶二年八月廿一日 大法五月廿 白 敬

以行功送示

一 定 善 業 系 經 卷 之 終 卷 之 終 卷 之 終  
用 此 日 中 才 一 卷 經 大 法 之 功 用 日 為  
字 寺 定 以 經 卷 之 終 卷 之 終 卷 之 終  
生 之 後 經 卷 之 終 卷 之 終 卷 之 終  
一 門 後 中 之 終 卷 之 終 卷 之 終 卷 之 終  
等 心 院 終 卷 之 終 卷 之 終 卷 之 終



### 緒言

釋迦世尊一代五十年の聖教は。東流して南北の十師其義蘭菊なりしが。天台大師出現して五時八教の綱格を建て。茲に始めて佛教の本能を發揮して社會を救ひしが如く。我日本國の宗教亦散亂して麻の如くなりしに。聖祖日蓮出現して。各宗元祖の誤りを打破し。以て世尊の魂魄法華の神髓を宣揚せられ。佛教の化益普く國家に及び。順逆二因を一切の心田に植ゑし耳ならず。天台大師の内鑑に留めて未だ弘通せざる法華本門の大法を光顯せられたり。是れ日蓮門下の私言にあらず。正しく佛識なり。照照として著明なる事實なり。

夫れ世尊一代所説の神髓は唯だ法華經に在り。無二亦無三なり是れ世尊の自言自證公示明白せらるる處。他の加言容喙を許さざる神聖事とす。

經の謂ゆる『如來祕神通之力』とは是れなり。又云く『如日月光明能除諸幽冥斯人行世間能滅衆生闇』と。他なし此は世尊自らが日蓮の出世を豫言せられたる佛識なり。果然其豫言は適中したり。日蓮は日本國に誕生せられき。時期も。教機も。世勢も。活動も。凡て皆佛識と違はず。此事にして無かりせば。法華經は戲論のみ。世尊は妄語の妖魔のみ。乃ち法華經をして戲論ならしめず。世尊をして妄語の妖魔たらしめざりしは。一に唯た日蓮の出世ありたればなり。左ればこそ聖人は曰はれき。『日蓮ダニモ此國ニ生レズバ殆ド世尊ハ大妄語ノ人。八十萬億那由他ノ菩薩ハ提婆ガ虚誑罪ニモ過ヌベシ。經云有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者云云。今ノ世ヲ見ルニ。日蓮ヨリ外ノ諸僧。誰人カ法華經ニ付テ。諸人ニ惡口罵詈セラレ。刀杖等ヲ加ヘラルル者アル。日蓮ナクバ此一偈ノ未來記妄語トナリヌベシ』と。又曰く『惡世ノ中ノ比丘ハ邪智ニシテ心詭

曲ナラン。又云ク與白衣說法爲世所恭敬如六通羅漢。此等ノ經文ハ今ノ念佛者。禪宗。律宗等ノ法師ナクバ世尊又大妄語ノ人也。常在大衆中乃至向國王大臣波羅門居士等。今ノ世ノ僧日蓮ヲ譏訴シテ流罪セズバ此經文虚シカルベシ。又云ク數數見擯出等云云。日蓮法華經ノ故ニ度々流罪セラレズハ數數ノ二字如何カセン。此二字ハ天台傳數モ未ダ讀玉ハズ況ヤ餘人ナヤ。末法ノ始ノシルシ恐怖惡世中ノ金言ノアフ故ニ日蓮一人此ヲ讀メリ。例セバ世尊付法藏經ニ記シテ云ク。我滅後一百年ニ阿育大王ト云王アルベシ。摩耶經云ク我滅後六百年ニ龍樹菩薩ト云人南天竺ニ出ベシ。大悲經ニ云ク我滅後六十年ニ。末田地ト云者地ヲ龍宮ニツクベシ。此等ハ皆佛記ノ如クナリキ。然ラズバ誰カ佛教ヲ信受スベキ。而ニ佛。恐怖惡世。然後未來世。末世法滅時。後五百歲ナンド。正妙一本ニ正シク時ヲ定ム。當世法華經ノ三類ノ強敵ナクンバ。誰カ佛說ヲ信受セン。

日蓮ナクバ誰ナカ法華經ノ行者トシテ佛語ヲタスケン。南三北七。七大寺猶像法ノ法華經ノ敵ノ内ナリ何ニ況ヤ當世ノ禪。律。念佛者脱ルヘシヤ。經文ニ我身符合セリ」と

『如來祕密神通之力』の妙義は。斯の如く日蓮聖人の身讀に依て顯現せられ。之が説明書として六十餘卷の妙判は。極東の虚空と有縁の人心とに印刻せられたり。末法萬年の大導師は此に在り。『智者ニ我義破ラレズバ用キシ。我日本ノ柱トナラン我日本ノ眼目トナラン我日本ノ大船トナラン』との一大獅子吼は。六百五十歳尙不絶斯聲。大道古今無し東西無し。人は唯だ其大道に到達し能はざるを憂ふるなり。大道に到達し難きを氣遣ふなり。宗教の價値ある所以は。大道其者の實體に向て到達せしむるの方法。印ち言教言行を示すに在り。而も難修難行の理論的空式を避けて。居常實際の活式を示すに在り。斯て道德の基礎たるべく。倫理

の根底たるべく。宇宙唯一の妙理妙體たらざるべからず。是等の條件を圓滿具足する神聖を呼んで妙法蓮華經といふなり。日の東方より昇るが如く。日蓮は日本より現はれたり。日の宇宙を普く照すが如く。日本的宗教は遍く宇宙を照さざるべからず。能照は日本なり。所照は三千世界なり。之を日蓮の日本主義となす。左れば日章旗の皇威を世界に示すと共に日蓮主義の伴隨して。渾圓球上を日本化せんとして。日蓮の所期たらずんばあらず。

一夜東海偉星落ち。忽爾津梁を失ひたるが如し。群雄各々法門の一角を擁し。相競ふて法幢を樹立するの極。巨眼全局を曠ふする能はず。隨て大中至正の教神を逸す。之を嘆きて起ちたる者實に是れ我立妙能化日什上人其人なり。

世尊一代の綱骨一切經の神髓たる實教の冲微は。迹化他方の諸菩薩等

に授與せられず。獨り本化の上行菩薩に付囑せられたり。是故に本化の再誕に非ずんば此大事を顯示する者無し。茲に我聖祖日蓮は法華經勸持品の佛識に當り。正しく上行の再誕なることは前既に叙述するが如く。佐渡法難の後、世尊の魂魄。法華の肝心。正像未弘の三大祕法を。始めて我日本神國に建設せられたり。然るに聖祖滅後幾年ならずして。此大法紛亂し。學海に漂ひ。或は偏し或は傾き。終に歸着する所を失ふ。斯て一百年の後。不思議の因縁にて。聖祖の遺訓は玄妙能化の心中に投影す。宿福深厚の推す處乎。能化肝に銘じて感激措かず。乃ち過時去曆の天台宗を抛ち。奮然として末法相應の大法に歸順し玉ふ。紛亂せる各派の師に頼らず。仰て直に日蓮大聖人に歸伏し。經卷相承の大義を奉じ。本佛別付の要法を再興して。普く都鄙に廣布せられたり。而して什師所信の要法たる法華神髓は。直弟日妙の中折を悼みて。之を追福せらるる際。

諷誦章に綴りて遺憾なく其教軌祕法を發揮せらる。以て一は愛弟の菩提の資糧とし。一は末代眞俗の佛道修行の龜鏡。成佛得道の指南とせられたり。是の如き上人逝て亦五百餘年嗣法傳燈なきに非ずと雖。復日什上人なし。

明治維新以來茲に四十年。國運の勃興文運の發達と共に教界亦其影響を受けて。宗教的知識の進歩は驚くべきものありと雖。多くは皆學問の人。智術の人。才辯の人。口舌の人にして。盛名赫々聲望隆々自ら得たりとするものの如し。此時に當りて隠れたる小林日至上人のあるを知らざるべからず。上人は眞に自然の産したる篤學實行者なり。深く宗義の蘊奥を極め。終生寺院を領せず。葬祭を専らにせず。其神身を傾倒して講經と說法に貢獻すること既に三十年。齡正に七旬に近くして尙墨黧壯者を凌ぎ日夕諄々帝都の有志を教導して倦むことを知らず。孳孳として



螢雪經釋に親むの外餘念なきの精力に至ては。誰か敬服感服せざるを得んや。憶ふ六十七歳にして聖日蓮の神文を眼にして。四明峰上の學頭を抛ちて本化の正統を傳承したる日什上人の面影を。即ち小林老師の法義は日什上人の其儘なり。諷誦章示す所と毫厘を違へず。一器の水を一器に移したるが如し。而も其聲聞を視ること淡として雲水の如く。物欲淫盛を極むる大都の中央に正義清氣の別天地を構ふる高風に至りては。什。至。兩師の間。知らず靈的默契あるに非ざるなきを得んや。不肖日暢老師の講帷下に侍し採薪汲水の縁を重ぬること十餘年。去年孟夏薰風新緑の好季を卜し。不肖等上人に請ふて西は長門の萩より東は尾張の名古屋に至る各地に巡廻講演を開催し。前後五十日。社會各階級の公衆に日蓮主義の神髓を聴かしめたり。此間不肖は始終隨行して其講演を筆記するところあり。私かに思ふ後日之を編輯して世に公にせんものと。然るに

塵事忙々夏去り秋來るも未だ果さず。偶其十月上旬上人を訪問すべく出京の機會を得しかば。之を上人の信徒諸氏に圖りしに曰く予等も疾くより上人の説法録を刊行せんとして未だ得ざるを遺憾に思ふの際なれば共に所思を果さんかな。望むらくは所と人とを代て隨宜説法せし記録より己上に出で。更に上人に乞ふて後日の紀念となすべき一大事の法門を具體的に聽講し。之を整束して公刊せんと。乃ち上人の快諾を得。茲に幹部信徒を上人の帷下に招きて開講するに至れり。而して講演は直に法華經全部に據りて其要義を闡明せんか又は別に講題を設けて重要教義の難問題を解決せんかとの議ありしも。結局卷頭に掲載したる日什上人の諷誦章講明を適當なりとしたり。抑も本章は日宗全體の根本教義を宣示せられたる無比好個の解釋なることは前既に一言したるか如し。不肖は専ら筆記と編輯を擔當すべく用意し而して上人の信徒若干は家業を擱き。十有

餘日聽講三昧に入りて餘念なかりし其求道思想の熱烈なる轉だ感ずるに堪へたりき。

本書は諷誦章講義と稱すれども其要は法華經の神髓を伺ふに於て遺憾なきを信ず。但予が筆受の粗笨なる。或は上人の講旨徹底を缺き。或は遺漏の點なきを期する能はず。且つ字句の明達を失ふ如きあらば其責不肖に在り。幸に大方同志の指摘を受けて。他日再訂を期せんかな。

明治四十四年七月上旬

日 暢 謹識

## 凡 例

一 什師の眞筆は嚴密に撮影して。圓滿の文意を傳ふると共に。其筆蹟を世に示さんと欲するにあり。

一 什師自傳は祕書にして未だ世に知られず。而も晩年會津妙法寺に於て親しく記述せられたるもの。今之を讀者に紹介するの必要を感じ。謹んで掲載するものなり。

一 讀者は必ず緒言を精讀して。能く諷誦章の眞價

凡 二  
を付度し。本書發刊の趣旨を了得すべきなり。  
一科段は講師の工夫に由て。日達上人の分科を一  
見明瞭に圖解せられしものなり。  
一 貢己下卷尾に至るまで。講師親書して。編者  
に賜與せられたるもの。文義整然として雅味あ  
るを觀るべし。

### 日什上人自傳 (眞筆會津妙法寺ニ在リ)

予ガ俗姓ハ清和ノ末孫石堂氏。母ハ桓武ノ流ナリ。大塚ノ館ニテ正和  
三甲寅四月廿八日ニ生ル。童名ハ玉千代ト號ス。後ニ權太郎ト改名ス。  
自國ノ事ナレバ面々知之故ニ略ス。十九ノ春。出家シテ比叡山ニ登リ。  
慈遍僧正ノ弟子トナリ。三十有八ニシテ一山ノ能化トナリ。此嶺ニ於テ  
三十九ケ年ノ春秋ヲ送り。齡五十八ニシテ隱遁ノ身トナリ。親ノ墓ヲ拜  
セン爲。故郷ニ歸リタリ。當國ノ城主葦名四郎ナル者ハ。俗縁ナル故ニ  
祈願所ノ羽黒山東光寺ニ移ス。乃チ此嶺ニ引籠テ。圓頓ノ月ヲ頂キ。止  
觀ノ窓ヲ閉テ。一念三千ヲ凝ス。然ルニ古因ノ諸僧。遠國ヨリ來テ隱遁  
ヲ不緩。常ニ五百餘人ナリ。爰ニ有包符解テ之ヲ見ルニ。開目抄上下如  
說修行抄ノ三冊ノ書ナリ。即チ分明ニ之ヲ察シタリ。日蓮ノ舌下直聞ス

ルニ異ラズ。隨喜ノ涙衣ヲ濕ス。是ニ由テ之ヲ惟ルニ。我之天台宗ハ過  
 時ノミ。故ニ天台ノ法水ヲ忽捨。末代相應タル日蓮ノ流義ヲ勵ント欲シ  
 テ。三冊ノ御書ニ奉向捧歸伏狀。師弟ノ契約ヲ成就ス。其夜夢ノ告アリ。  
 即チ名ヲ日什ト改メタリ。依之一山ノ學徒等僉議シテ云。此立妙者其智  
 德天下ニ彌ル。然ルニ今改宗ノ風聞アルハ。天台宗ノ滅亡ハ不足言諸宗  
 ノ化物タリ。此能化ハ氣違ヒタルカ。魔ノ人タルナルベシ。事延引ニ及  
 ベカラズ。今夜丑ノ刻ニ眠藏ニ忍ビ入り首括ント欲ス。時ニ最負ノ者ア  
 リ窃ニ内奏シタリ。之ニ驚テ霄ノ間。紛レテ死ノ難ヲ遁レ。彼山ヲ裏傳  
 シテ。不動瀧ノ所へ逃降ル。深山ノ夜路。其難堪推量シ玉へ。荆棘逆ニ  
 横ハリ。道ヲ閉ヂ草鞋ヲ放テ。ツマダテリ。○○刻彫シテ衣モ裂ケ裸ト  
 ナリ。漸ク明方市中ニ出デ。日出山又十郎所へ逃込デ潛タリ。日出山  
 甲斐々々敷命ヲ助テ深ク隱スユト四ヶ月。其間思惟ス。今ノ法華宗恐ク

ハ祖師ノ本意ヲ失ヒ。正理ニ背ク。予幾ナラヌ齡ナリトモ。身命ヲ掛的  
 予ガ門徒ヲ建立スベシト志シタリ。誠ニ危キ願ナレドモ。後ノ便リト成  
 ベシ。息ノ通ハン限ハ。只一筋ニ思ヒ定テ。日出山ガ宅ヲ忍ビ出デ。己  
 ニ上洛シ室町ニ宿ス。時ニ人王百代後圓融院ノ御宇。紫震殿ニ臨デ奏聞  
 シテ。某ハ天台宗ノ僧立妙ト申者ナリ。然ルニ今法華宗ニ歸伏仕タリ。  
 諸宗ハ無得道ノ邪法ナリ。庶クハ諸宗ト某ト召合サレ。糺明有テ。法華  
 ノ正法ヲ於爲御信用。可爲安全旨ナ。意趣書ヲ以テ再三捧奏聞。然而  
 鷹司中將殿へ内奏シ。則チ二條關白殿ニ對シテ訴狀ヲ捧タリ。時ニ御所  
 泉殿ニテ宗義ノ意業ノ趣ヲ被糺タリ。言上シテ云。日蓮ノ弘法。時代押  
 移テ。今此意ヲ窺フニ。叶フ門派ナシ。故ニ廢ヲ起シ偏ヲ正シテ。都鄙  
 ノ爲ニ弘通セント欲ス。且亦諸宗ノ異同重々有之旨。高聞ニ達スル時。諸  
 宗對論ノ義ハ卒爾ニ許容シ難シ。然ルニ訴詔ノ趣尤モ殊勝ナリ。洛中ニ

於テ一字ヲ構ヘ一派ヲ興隆シ。宜シク弘通スベキ者也。

主上自然ト可歸伏旨天氣如件。時ニ御引物トシテ。先皇御書連歌而韻并ニ二位僧都ノ御敕印。頂戴之畢ヌ。人王百一代。後小松院ノ御宇。永德三癸亥。五條坊門東洞院室町ニ當テ一字ヲ建立シ。妙塔山妙滿寺ト號ス。作事系圖ノ御敕免賜之畢ヌ。依テ諸宗ハ墮獄ノ邪法タル談義日ニ不<sub>レ</sub>懈數年ヲ經タリ。又存生ノ中ニ奥州ニ降り。草庵ヲ結デ生所ノ土ト可成ト常ニ懷カ數思ドモ。古郷ヘ錦綾ヲ嚴ト云謂ナレド貯竭テ裸ナリ。古棲シ跡ヲ推量レバ。親者モ疎クナリ。昵キ人モ遠ザカリ。昔ノ宿モ今ハ却テ旅トナレドモ。如何ト弟子ヲ降シ看ント思フ所ニ。日出山ガ所ヨリ飛脚到來シテ。恨念テ云。花洛住居尤モ可快。去リ乍ラ我等ガ齡程モナシ。未ダ宗旨ヲ改メ忘恩畜モノナリ。早速我ヲ不導バ永ク可成怨云云。道理至極ナリ。依之心中騷シク成達テ奏聞シテ云。花洛ノ弘通永ク望ム

ト名利ノ咎モアリ。仍テ田舎ノ卑キ者ヲ教化スル事。化導ノ可本意候也。如此奏聞ヲ遂ゲ。則テ日出山ヲ柱杖ト恃ミ。漸ク下着シタリ。而シテ京都ノ次第様々物談タリ。偕繪旨ノ趣。品々爲戴。日出山不斜慶色不淺。偕ユソ日出山ガ働キ故。多ノ人々日什ヲ育テ可玉云云。昔見シ人ニ非ル者。各御信甚深故也。有祥而此寺ヲ給ル事。非小縁。惟併ラ後世ヲ不思召者斯候ベキ。則テ寶塔山妙法寺ヲ立ツ。所詮佛説ヲ顯ス爲ナレバ。得道立妙寺。轉法輪妙滿寺。涅槃妙法寺。是ニ身即一ニシテ如我昔所願今者已満足ナリ。神力品ノ三起塔ヲ表スル也。而モ今此處ハ諸佛入涅槃ノ道場ナリ。門弟於參詣輩日什眞實ノ弟子ト可成。今此處ハ衆戒ヲ收テ。末代相應ノ結戒ノ山ナレバ。予ガ門流爲眞俗貴賤一幅本尊今以現。末代奚ゾ奇事ナランヤ。

明德二年極月九日

日 什 花 押

行年七十八老眼拭書

# 當山諸檀那御中

## 諷誦章講義

小林日至上人講義  
高田日暢筆受

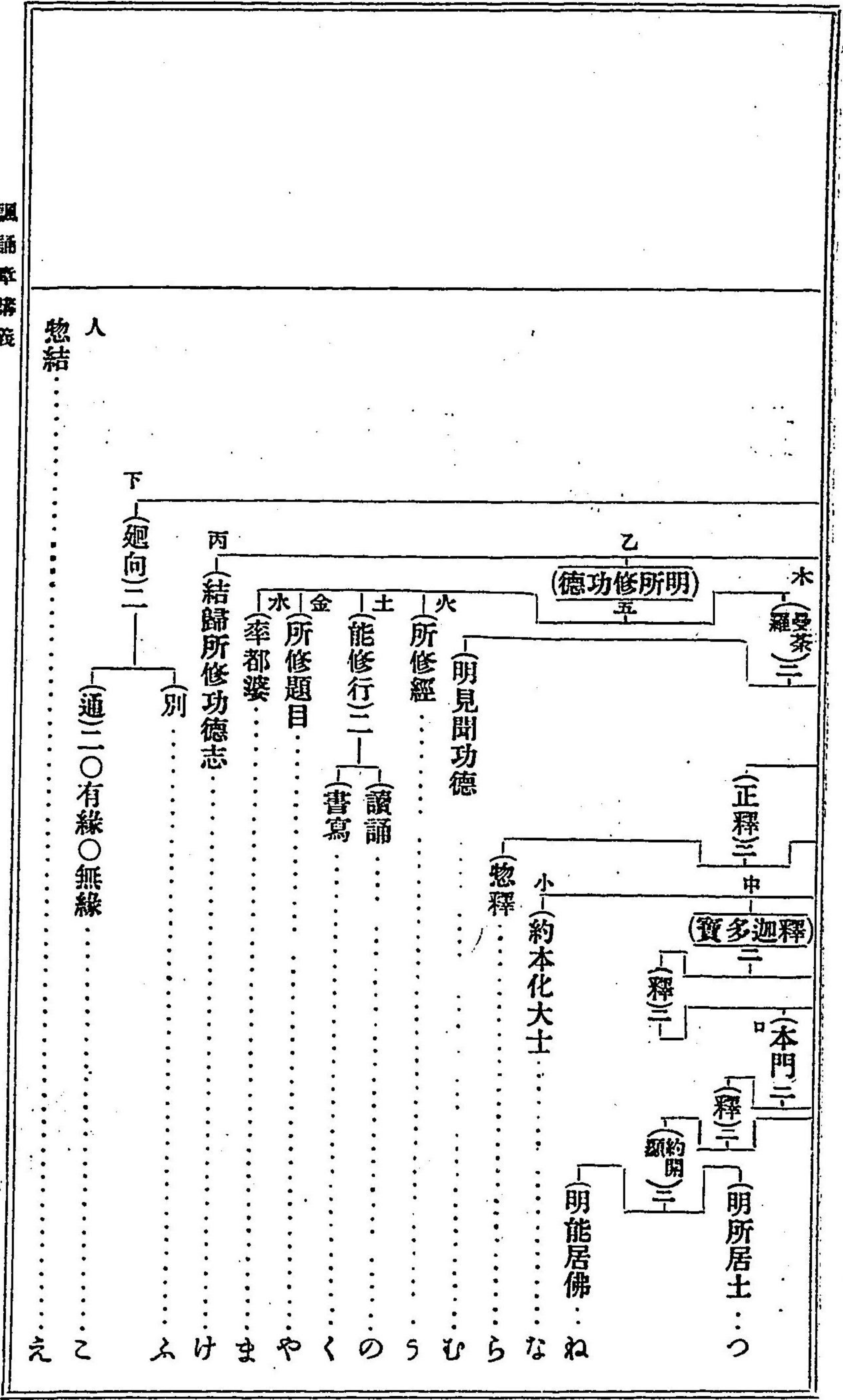
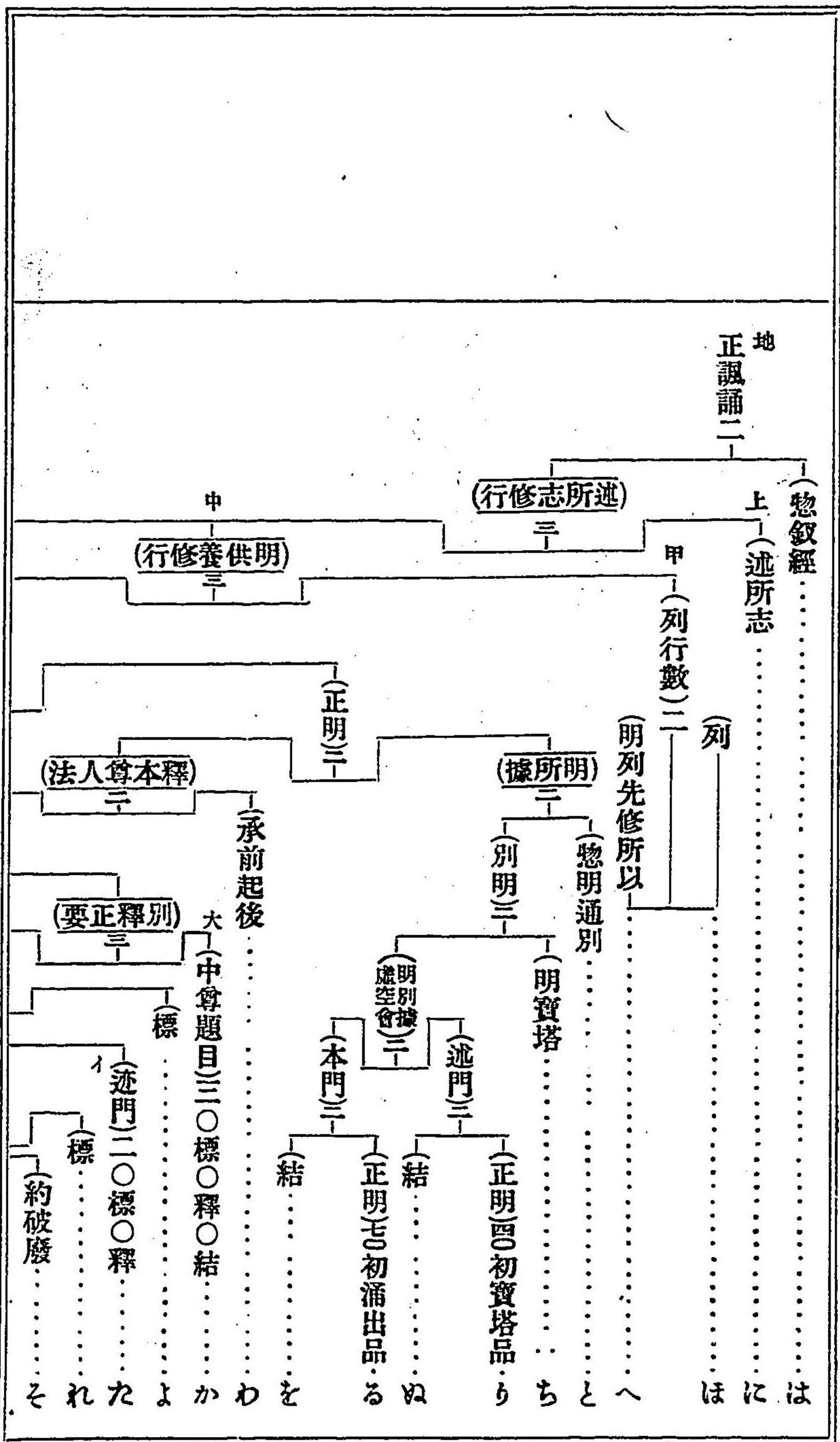
扱此諷誦章を講ずるに臨みて。先づ一章の大意を見易からしめんが爲に。先師日達上人（京都寂光寺の名僧延享年間の人也）の分科に依り何人にも分る様に。科段を圖解して左に示す。

諷誦文大分三

天 地 人 亦 中 上 亦 下 亦 甲 乙 丙 亦 大 中 小 亦 木 火 土 金 水 等

天 標 章 二

(標) (惣舉供養)



い 敬白

請諷誦事

(寫真版對照)

ろ 三寶衆僧御布施在之

は 風聞一乘妙法之花者。苟芬芬而薰三土之

舊菌。本覺顯照之月者。光明明而朗寂光

之青天。實教之伸微不可測量者歟。

に 伏惟者日妙上人遷化之後。愁淚未乾一

廻早到聊押悲淚以修菩提之資糧。

ほ 所謂奉圖繪寶塔大曼荼羅一補奉讀誦

妙法蓮華經一部。方便品一十二卷。壽量品

一百二十卷。十如是一千二百卷。自我偈一  
萬二千卷。題目一億二萬遍。奉書寫南無  
妙法蓮華經一萬二千遍。奉造立率都婆  
一本。

へ 然大曼荼羅者。幽儀存生時奉書寫之處。

聊欲展供養儀式捧追善。

と 此曼荼羅惣雖二旦三所三會之說相。別專

顯虚空一會之儀式。

ち 凡寶塔者。妙法所在之宮殿。諸佛恒居之心



城薩埵來集之住所。五輪本分之全體也。  
 多寶者乘此塔垂證明。釋尊者召分身開  
 塔戶並一佛塔中唱付囑有在舉六難九  
 易求末法導師。二提婆品。顯提婆龍女之得益。  
 奏一乘妙法之流通。三勸持品。迹化諸聖求弘  
 經自述惡世之方軌。四安樂行品。文殊者開章問  
 請方軌。世尊者說四法勸始行。  
 是則迹門流通之說相也。  
 次止過八恒沙之弘經。召本化寂光之地

涌因彌勒不知之疑問。顯釋尊久成之遠  
 本。二發量品。宣三身即一之應用。顯塵點久遠  
 之大悲。三分別品。校量一念信解之功德。四隨喜品  
 述歎轉展隨喜之勝利。五法師功德品。明六根互  
 用之勝德。六不輕品。引不輕大士之往事。舉而  
 強毒之之逆緣。顯逆即是順之圓意。七神力品  
 現十種難思之神力。付末法弘通之要法。  
 是則本門流通之大法也。  
 其要法者所謂題目五字是也。

か 然此妙法蓮華經者。二釋三諦圓融之法體性。

海果分之内證。萬行衆善之都名。本地甚

深之奧藏也。三結。是此本尊之本體也。

よ 次釋迦多寶二佛者。

た 先迹門意者。二釋一佛居一塔者。境智不二

之形。分身坐樹下者。利益周遍之相。三佛

三身表德迹佛果成之質也。

れ 次本門意者。

ろ 廢始覺顯本覺。破迹佛立本佛。本地難

思之境智用。無作三身之色心業也。

つ 所虚空者。示此土體一之常寂光。

ね 開遠本者顯三身一身之自受用也。應用

豎高三世。利益橫遍十方。

な 次上行等之四導師者。二釋最初實成之弟子。

久遠證得之菩薩。結要傳受之大士。末法弘

經之導師也。

ら 凡此大曼荼羅者。依正不二一人法一體。生

佛一如。十界互具之大曼荼羅也。

む 因茲謹聞其名。人者。盡三妄執於一時。一拜此像。輩者。證三菩提於一念。頓極頓證之秘法。即身成佛之龜鏡也。

う 次此經者。諸佛出世之本懷。衆生成佛之直道也。

の 讀誦者。耳根相應之修行。此士有緣之善根也。

く 書寫者。法命久住之根源。憶持不妄之大善也。

や 次題目者。界如三千之本名。三身果滿之內證。本迹兩門之肝要。先師弘通之本經也。

ま 次率都婆者。本極法身之普門。示現三身周遍之三摩耶形也。

け 佛力法力合力。尊靈增進無疑。

ふ 若然者。日妙上人酬一乘所修之惠業者。

開一實菩提之覺花。答題目五字之勝業者。詠五智圓滿之覺月。

こ 七世師恩。生生父母。親疎有緣。過現檀越。

普灑法雨。同成妙因。二無緣。及以法界平等

利益。

之便鳴三下之少鏡。式驚三身之尊聞。仍諷

誦所請如件敬白。

嘉慶二年八月二十一日

大法主日什敬白

本講義を聴く者は成るべく此科段を記憶して貰ひたい。本章は文面に顯はれたる如く。什師の弟子日妙と申す方が遷化せられし後。其一週忌に當りて追吊供養の爲に。大曼荼羅を奉安して懇懃叮重に修法せられし時期讀し給ひしものなり。然れども此諷誦章

は深意あり。故に其裏書に置文を遺付せられたり。其文左の如し。

置文

(寫真版對照)

日什門徒等可存知事

一此大曼荼羅所持寺號本立山玄妙寺者也。

開山日什第一貫首大藏卿阿闍梨日妙也。

以此寺定此門徒之本寺處也。代々貫首

事。

有門徒之望檀中談合擇器用可定貫首

者也。

一門徒中可得心事。大聖御門第六門跡並天目等門流皆依有方軌佛法共背大聖化儀處。不同心也。直日什仰歸日蓮大聖人處也。門弟等深可存此旨者也。但於下總真間有歸伏之狀並起請文。雖然依違法門並方軌大聖御儀所捨申者也。是捨惡知識之質也。

右日什之門弟徒尋此旨。於此旨違背輩者。可為謗法墮獄罪過。仍為後日置文

狀如件。

嘉慶二年八月廿五日二位僧都日什花押

日鑑ハ京都寂光寺住僧也

日鑑上人云右此狀ヲ諷誦文裏書ノ置文ト云。唯々當時日妙上人ノ追善而已ニアラズ。後代門中ノ眞俗男女ノ佛道修行ノ龜鏡。成佛得道ノ南車也。故常心可存大事也。此置文遠州見付玄妙寺ニアリ。其後妙滿寺ニ有ル事多年。天正年中ヨリ當寺(寂光寺)ノ什物タリ。門中ノ僧俗血脈相承トモ云ヘキ祕書也云云。

編者曰く己上二個の什師の直筆は。巻頭に掲載せる寫眞版が乃ち原書にして。京都寂光寺の什物と成てゐるのを。昨年十一月該寺に詣で住職田上寛靜師の快諾を得て。親しく直筆を拜觀しつゝ寫眞師に撮影せしめたるなり。眞に五百餘年の古寶物崇重すべきなり。

古事記は付師の高弟日蓮の作也

門徒古事記云。日蓮兼テ什上人ヨリ聽聞申セシ如ク。日義上人仰云。先師上人捨天台宗歸入當宗付。可心得子細有リ。高祖大上人門流ニ。六老僧。中老僧。等相分レタリ。是六老僧ノ中ニ。ヒキノ谷ノ日朗門徒ニハ。三ヶノ重寶ヲ傳タリ。蓮師ヨリ付弟狀アリ云云。富士大石寺。日興門徒ハ三ヶノ大事ヲ得タリ。吾付弟也。身延山日向門徒ハ。御勸氣抄ノ端書ニ。佐渡坊急々參レ。大事ノ法門可傳遊バセリ。是則付弟ノ義也。下總日頂ノ事ハ。指タル名稱ヲモ不聞トモ。師資ノ血脈僞ハリ傳テ。日頂ノ御茶毘所ヲ不知子細有之。又受持絶ヘタリ。天目日辨兩人ハ同心シテ。迹門十四品ヲ可捨。讀之者ハ謗法墮獄也。又上代ヨリ風聞スラク。六老ノ中五門徒ハ本迹一致云云。富士日興ハ本迹勝劣也。又五人謗法富士正義ト

云書ヲ作ラレタリ。又日朗門徒ハ。日印ト日像ト日輪ト三人付弟論有ト風聞ス。其外諸門徒皆不一准。相互ニ諍論ノ子細共多シ。是皆上代ヨリ。諸門家ニ風聞スル通也。爰日什上人仰云。大聖人ノ直弟ノ御代カラ。相互ニ是非諍論有ト聞ユ。實ニ上代ヨリ有之歟。又中古末代ヨリ各非義ヲ云振廻出。上代ヘユツラレケル歟。何ト尋レトモ。人人正直ニ答ル人難有ト覺ヘタリ。所詮大聖人御直弟ノ御事ハ。是非共ニ實證ヲ難知。故ニ是非ノ沙汰ヲ難申。但其末學達ノ化儀ニ付。法理ニ付。カタチカヒナル謬リ多々ナル間。左様ノ諸門跡ニハ同心不申シテ。但仰テ大上人ノ御内證ヨリ垂レ給覽御慈悲ヲ信用シテ。高祖ノ御心中ヨリ。直ニ法水ヲ可奉酌。扱吾骸分ノ及ン程ハ。隨力弘通ヲハゲマシ。佛祖ノ化儀ヲ助ケ申サハ。

定テ大上人ノ直弟ノ御影達モ。正直ニ渡ラセ給ハン程ノ内證ニ悦バシテ參ラセコソセンズラメ。曾テ上代ノ直弟ヲハ。實證ヲ不知シテ是非難申。扱ハツベキニ非レハ。中絶ノ法水ヲ。大上人ノ御内證ヨリ可奉續。是則經卷相承ノ一分也。已上是れより正しく本文に入テ講義するが。一字一句の詳解や。文義明瞭にして疑難の起らぬ所は簡略として。成るべく重要教義を解決することに力むべし。

**敬白請諷誦事**

『敬白』とは什師が御本尊に向ひ上りて敬みて白すなり。『請』は御本尊の救済を請願ふなり。其語を諷誦といふ。梵唄聲明等の吟詠引聲の類にて世の唱歌吟詩の如し。

**三寶衆僧御布施在之**

『三寶』とは佛法僧の三をいふ。三寶の名は一なれども大小權實本迹の教々に由テ其内容は皆異れり。住持三寶。相從三寶。別相三寶。一體三寶。等幾多の差別あれども。今は法華經本門常住の三寶。乃ち本佛釋尊を佛寶とし。本法華を法寶とし。本化の上行菩薩等を僧寶とす。併しこれ猶極意にあらず。日蓮聖人の本懷は本門常住の一體の三寶なり。一體の三寶とは妙法蓮華經の五字これなり。

『衆僧』とは列席修法の僧員なるべし。『御布施在之』とは三寶へ法供養。衆僧へ齊會供養。この二を兼備したるをいふ。

参考 世人往々五字七字の妙法を直に三寶中の一法と謂へども『妙トハ絶ト申ス』の聖判の如く。絶待的不可思議體のものであつて決して相待的に三寶中の一寶として思議すべきものでない。佛法僧の三寶を總轄し統一せる根本體が妙法なり。これが眞に本佛の境界であることを知らざるべからず。人は驚惑せんも實義は正しく茲にあり。

妙法がもし單一の法ならば妙にあらず又蓮華にもあらず。聖祖は妙法を釋して『本地難思の境智』と判ず。その境とは森羅三千の萬法なり。智とは妙覺極果の佛智なり。この境智の二法は本來冥合して不可思議なるが故に妙法といふ。又蓮華を本因本果と釋す。本因とは本有の僧寶なり。本果とは本有の佛法なり。この僧佛二寶無始より互具互融して不可思議なり故に妙法蓮華といふ。聖判

に『無作三身ノ寶號ヲ妙法蓮華ト云也』三身とは則ち三寶なり。其詳細は己下の講說に至て明示すべし。

風聞一乘妙法之花者。句芬々而薰三土之舊  
 菌。本覺顯照之月者。光明々而朗寂光之青天。  
 實教之冲微不可測量者歟。

この一段は花月の譬に寄せて。法華經本迹二門の大意を稱歎したるものなり。

『風聞』とはこれ謙遜の辭なり。本佛釋尊に對して日什は遠く萬里を隔て遙に二千年後の末代に生れたる凡僧にして。親しく聽聞せしにはあらずとなり。

『一乘妙法之花』とは法華經迹門に來りて。爾前四十餘年の間に



説きし諸乘則ち方便權教を破開して一乘の眞實を顯はし。茲に始めて釋尊出世の本懷を宣ふことを得たり。これ恰も春來りて花の開きしが如しとなり。

『苞芬々』とは花の色香の盛んなる如く。三世十方に亘りて貴賤上下のへだてなく。十界皆成佛の利益を與ふる法華經の力用は諸經に勝れてめでたきをいふ。

『薰三土之舊菌』とは同居。方便。實報。を三土といふ。これ方便權教を修行した人達が居住する所であつたが。今法華經の利益に由て新たに佛界の寂光淨土に入ることを得たり故に舊菌に薰すといふ。薰は開權顯實の教力を蒙るに譬ふ。

『本覺』とは本門に至りて始成正覺の迹佛（十九出家三十成道といふ）を破開して。久遠實成の本佛を顯はすの意を明す故。今は久

成の佛をさして本覺といふなり。

『顯照之月』とは權教と迹門とは十界の色心無始常住なるを隱覆して闇夜の月の如し。本門壽量品に至りて理。智。悲。三身三世常住の本佛顯露照著にして。實の十界互具ここに成立したるは。暗夜に明月の現はれたるが如し。

『光明々』とは本佛の自受用の智體を月とし。其修得の智の作用の光があきらかに輝きわたり。甚大久遠の事も明かになりしをいふ。

『朗寂光之青天』寂光は不思議極智の所居で。則ち本佛釋尊の法報。應。三身如來が居住し玉ふ本國土なり。この寂光土は無明の雲晴て。青天白日の如くあきらかなりといふことにして。是れは本地難思の境智冥合をあらはす。月は智に寂光は境に譬ふ。この月

と土と一體不二不思議なるは本門の特長にして。有情非情の互具互融。一念三千の法門ここに初めて成立す。これ顯本の冲微なり。

『實教之冲微不可測量者歟』とは。實教の語は本迹に通ずと雖も。冲微の語正しく顯本を稱歎するなり。故に法華本門の教理は。甚深微妙にして言ばも心もとどかぬぞといふなり。

伏惟者。日妙上人遷化之後愁涙未乾。一廻早到聊押悲涙。修菩提之資糧。

これ則ち日妙上人の一週忌にあたりて。追善菩提のために供養式をあげたることをのべたり。遷化とは別天地に遷りて教化するといふこととて則ち法師のこの世を去つたこと。菩提とは梵音の阿耨多羅三藐三菩提て無上三佛道と譯す。最も尊い三身如來を顯は

す資糧として茲に修行したてまつるのであるとの義なり。菩提のことは下に至て解釋すべし。日妙上人は什師改宗已前より隨へる六人の弟子中の一人にして。遠州見付支妙寺の嗣法として秀才なりしが。惜哉嘉慶元年八月二十一日年僅に十八にして遷化せられたり。

### 所謂奉圖繪寶塔大曼荼羅一補

これは奉安せし御本尊のことを申されたので『圖繪』とは畫像なり。『寶塔』とは寶塔品に現はれた五百由旬の七寶塔なり。其御本尊は今日吾人が奉安する文字式や木像式とは違ひ。圖繪寶塔等とあるからまづ寶塔の形を繪いて其中尊の七字の妙法を文字とした外は佛菩薩等悉く畫像にして。現今相摸飯田の本興寺から頒與す

る畫像の曼荼羅が則ちこの寫眞なるべし。

或人のごとく圖繪寶塔とあるものを。無理に文字式の本尊と観るには及ぶまい。聖祖が阿佛坊に寶塔を授けし故事もあれば。畢竟心が音聲となり音聲が文字となり又畫像木像ともなる物心一元なるが故に。但その本體本質を曲げたり隠したりすることなく高尚圓滿に寫象すれば何れでも差支なかるべし。

『曼荼羅』とは梵語であるが圓滿具足の尊體といふことになる。聖祖は『妙法曼荼羅』とも『本門本尊』とも或は單に『御本尊』とも仰せられたり。御門下眞俗は宜しく之を遵奉すべきなり。然るに現今日宗の僧俗多く『十界曼荼羅』といふが。恐らく是は正當の冠稱にはあらず。十界互具百界千如云々の曼荼羅といふ略稱ともい

はれるが。聖訓に確實な名稱があるを敢て避るには及ばざるべし。もし『十界勸請本尊』といふに至ては彌々不當の名稱なり。十界衆生の連名を見てかくの如き御方を皆合祀してあるから有難いと謂ふならんも。其れでは聖祖が其十界例名中の或ものを省略した御本尊があるが是は圓滿でない様に思ふべし。由てこの御本尊は決して斯る意味で拜觀すべきものでなひ。十界も百界も天地法界有情非情一切。萬有を悉く具足して毫も缺漏なき其法體で。此實名は最早聖祖の御示しになつた『本門本尊等』と申すより外に種々呼稱すべきものにあらず。

奉讀誦妙法蓮華經一方便品一十二卷壽  
量品一百二十卷十如是一千二百卷自我偈一

萬二千卷題目一億二萬遍奉書寫南無妙法蓮華經一萬二千遍奉造立率都婆一本

これは讀誦せられた御經と御題目の卷數及び順序を明し。書寫の行と塔婆の事を白された御文で一讀明瞭なり。但「十如是」とあるのは今日吾々が常に讀む方便品のことにて。單に三轉讀の文乃ち「所謂諸法」已下卅八字の文ばかりではない。一品の最初からこの三轉讀の文迄を「十如是」と仰せられたるなり。方便品を壽量品に對し十如是を自我偈に對したるにても推量せらるべし。又塔婆の謂れを知らぬ人は左程必要ならぬ一片の形式でもあるかのやうに見るも。其大切なることは下に至て講明すべし。さて此一段は末法應時の修法中特に正式法要を實行なされたもので。乃ち一部

經を讀誦するに「本正迹傍」と心得。次に要品を撰讀するに「從淺至深」の秩序を踐みて。迹門の中心たる方便品。本門の中心たる壽量品。方便品の中心十如是。壽量品の中心自我偈と。漸々に煎じ詰て此讀經を助行とし。彌々佛教の神體宇宙の根本中心たる南無妙法蓮華經を信唱して之を正行となし。次第正しく進み本末輕重整然として一糸も亂れぬ。嚴格の方式を明されたのであるから。宜しく修法上日蓮門下の明鏡となすべきものなり。然るに御經が近道で御題目が廻り遠い様にいふ顛倒者。又は何か他の知らぬことを唱へて勿體らしく思ふ謬見者は論外者として「一經ノ讀誦ヲ許サズ」とか「末法に入ヌレバ餘經モ法華經モ詮ナシ只南無妙法蓮華經ナルベシ」等の制誡がありながら。而も讀經をなされた聖祖の御意を誤解せぬ爲の心得ともなり。かつ修行の

雜亂を糾明する究竟の模範なり。最も數字通り窮屈にいつも嚴修せよとの仰せではなく。修法の方針として大體の格式を定められたるものなり。政に聖祖在世の信者が法華經全部を一返讀誦して題目五萬返を唱へたといふのも。畢竟この格式に則りしものと合點すべし。

而して本來法華經の修行法に五種あり。一には受持二には讀三には誦四には解説五には書寫の行なり。此中で只今御書きになつたのは二と三と五であるが。抑もこの五種修行の中心は受持の妙行なる故。今之を形式の文字に列記せずと雖丁重なる解説に由て。其實質たる(五種行の)御本尊を信解すべきことを獎勵せられたるものなり。

然大漫茶羅者幽儀存生時奉書寫之處聊欲

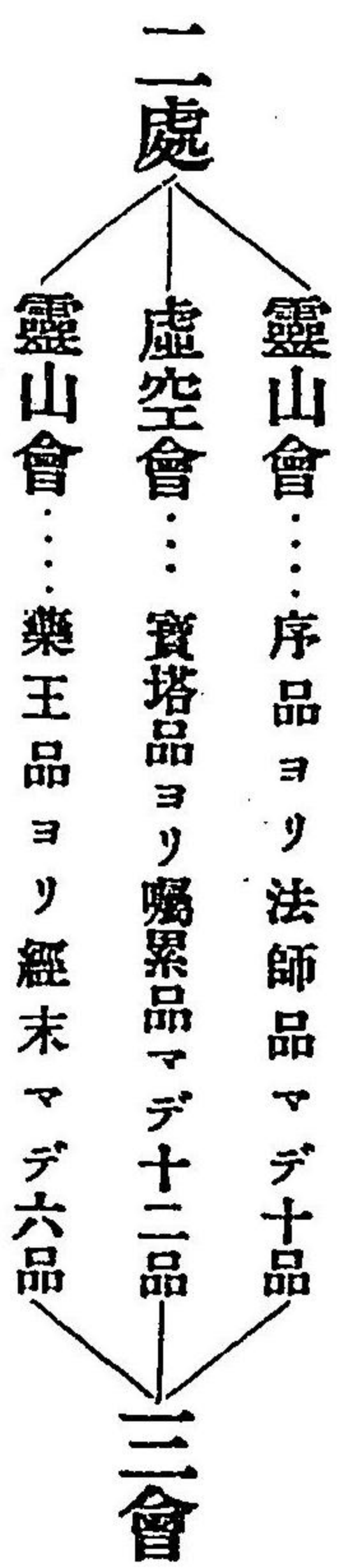
展供養之儀式捧追善

これ則ち奉安する御本尊は日妙上人の生前に薰發せし信念力の要求に應じて。日什が謹寫して授與したるものなるが。歿後の今日も亦受持の妙行を勵む吾々行者が。追弔供養をなす第一要件として茲に信敬し奉るものなりとの意なり。

此漫茶羅惣雖互二三所三會之說相別專顯虛空一會之儀式

此御本尊は妙法蓮華經の左右に釋迦多寶の二佛。上行等の大菩薩を顯示したれども。文珠普賢舍利弗目連等を省略して表には存せず。然れども二處三會に互るといふゆゑ。法華一部の總體をあげたること勿論なれば。今の圖顯は略式なれども其本體は必ず

一切の諸尊を網羅すべし。二處三會とは法華經一部八卷廿八品の説法の會座及び其場所をいふ下の圖の如し。



さてこの御本尊中の釋尊は寶塔品に初めて來られた多寶如來と並んで座し給ふ虛空會の御姿なれば。初めの靈山會には互らぬ様なれど。參列の諸尊を拜するに序品列座の梵釋日月等も。又經末に始めて來りし普賢菩薩も皆安住し給ふゆゑ。惣じて一部八卷二處三會の説相に互ること明かなり。然れども妙法蓮華經の實義が顯はれた所は中間の虛空會のことゆゑ『別顯虛空一會之儀式』といふなり。聖判に『寶塔品ノ時事起リ壽量品ノ時事顯レ神力囑累

ノ時事竟ル也』と仰せられたるは則ちこの意なり。

### 凡寶塔者妙法所在之宮殿諸佛恆居之心城薩埵來集之住所五輪本分之全體也

この五句三十三字は寶塔の功德を明したる文なり。寶塔の異名を塔婆ともいふ。『寶塔』とは前にある圖繪の七寶塔にして靈山虛空會上に實現したる五百由旬の寶塔なり。此中に顯はれたる妙法なれば寶塔は外形にして妙法は内容なり。

この五句を説明するに事相(事實)と觀心(道理)の二つに分ち。第二句と第四句は事相にして第三句と第五句は觀心の如く見ゆれども。實際は事相に觀心を具有し觀心に事相を具有したもので相互相離れざること猶心と體との如し。畢竟道理(觀心)の上に建立し

たる事實(事相)なりと知るべし。由て先づ道理を明して後事實を示すことにせん。

『妙法所在之宮殿』とは寶塔の中に妙法が顯はれたことを釋したるなり。

聖判云今當體蓮華ヲ釋スベシ。當體蓮華トハ一切衆生ノ胸中ニ八分ノ肉團アリ白クシテ清シ。生ヲ受タルモノハ皆悉ク此八葉ノ蓮華ヲ胸中ニ收メタリ。其東葉ニハ阿閼佛。南葉ニハ寶性佛。西葉ニハ無量壽佛。北葉ニハ不空成就佛住シ給ヘリ。辰巳ニハ普賢菩薩。未申ニハ文殊。戌亥ニハ觀音。丑寅ニハ彌勒。八葉蓮華ニ四佛四菩薩坐シ給フ。中央ノ大日如來トハ八葉九尊ノ佛ナリ。眞實ニハ之ヲ佛性トイフコト則チ妙法ナリ。サレバ衆生ハユノ法身ノ宮殿ナリ乃至無量ノ諸佛ヲ納メタルイミシキ塔婆ナリ。世間ノ

塔ハ衆生此理ヲ知ラザル間。自身ハ諸佛ノ塔婆ニテアルゾト教ヘタル能詮ナリ。之ヲ利根ノ者ハ我身ヲマナタル法界ノ塔婆ニテアリケルゾト知ル。之ヲ開悟トハイフナリ。此胸間ナル八葉ノ蓮華ヲ蓮華トイフ。上ナル九尊ノ體ヲ妙法トイフナリ(御義上)

これは眞言の八葉九尊を用ゐし故怪しく思ふ人もあらんかなれども決して左様ではない。名目は彼にあれども實義はこの法華經にあるから。今は開會の義を以て用ゆべし。されば九尊中に釋尊の名はなけれども。實には中央の大日か則ち釋尊なり。結經に『釋迦牟尼佛名毗盧遮那遍一切處』とある故なり。

さて衆生の肉團に備へたる八葉蓮華が現はれて寶塔となり。其八葉に安座まします九尊が妙法なりといふ義なり。

中央の大日は法身。四方の四佛は報身。四隅の四菩薩は應身の

變化の有様を示したるものなり。

これは一往衆生に分り易く説明したもにて。實には何人にも皆互にこの一切を一人に具備してあるぞ。其有様が俱體俱用當體の妙法なり。乃ち己心中の八葉九尊が妙法で。この妙法を包める吾身は其宮殿たる寶塔であるぞとなり。

かくの如く道理を含める上に事實の寶塔が現はれた證據は本經に見寶塔品とあるが。理は不可見無對色で見る形も色もない故見といふべからず。見といふのは必ず實物で無ければならぬ。されば。

聖判云其本尊ノ爲體本時ノ娑婆ノ上ニ寶塔空ニ居シ塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニハ釋迦牟尼佛多寶佛ナリ釋尊ノ脇士ハ上行等ノ四菩薩ナリ。文珠彌勒等ノ四菩薩ハ眷屬トシテ末座ニ居シ迹化多寶

ノ大小ノ諸菩薩ハ萬民ノ大地ニ處シテ雲客月卿ヲ見ルガ如ク十方ノ諸佛ハ大地ノ上ニ處シテ迹佛迹土ヲ表ス(本尊抄)

實物の寶塔は恰も家屋（きやうゑ）の如く妙法は住者の如し。聖判分明にして疑ふ餘地なし。而して本經に於て寶塔の現はれた時。其塔の中に釋迦多寶の二佛が並座せる其中央に七字の題目が顯はれて有しや否やといふに。此妙法に就て在世は音顯滅後は書顯の相違あり。然れども塔中にまします二佛の中心に妙法蓮華經の梵音聲を有すれば義としては有りといはざるべからず。二佛虚空の寶塔の中に並座するは何事ぞといへば。これ則ち妙法を顯説して本化の菩薩に附囑せんと欲するものなるが故に。妙法宣揚といふ事より外には何ものもなしと利根の人々は直に之を認むるなり。されば二佛並座といふことが妙法の妙法たることを事實に顯示せるものなり。



下の文に之を「境智不二之形」といふ境智不二はこれあに妙法にあらずや。斯の如く二佛並座が即ち妙法なりとせば。眼前に最も明かに見ゆる事實の妙法なり。然れども梵音聲にも顯はれて一度は『妙法蓮華經皆是眞實』といはれ一度は『妙法華經付屬有在』と稱へ給ふ。是故に聖祖は上記の本尊抄の如く明確に事實の證明をなされたものなり。

妙法顯説の處はいつも塔中に限るかといふに勿論なり。妙法其物は三世常住不改にして且らても事物の本體を離れることなし。之を有のまゝに示すには矢張事實の通りに表彰せざるべからず。是を以て他の處や別の儀式で説くことは斷じてなく。無始無終この塔中を離れざることを三世諸佛説法の儀式にして。恆例として必ず變更せぬものと心得べし。

『諸佛恆居之心城』とは本佛迹佛等の諸佛が。皆この寶塔の中に居住し給ふことをいふ。心城と宮殿とは同じであるが。心城といへは直に觀心門が見ゆる。乃ち諸佛とは九尊。心城とは八葉を指す。

聖判云衆生ハ皆塔婆ナリ。中略八葉九尊ノ塔婆ニテアリ乍ラ迷ヒソメシ一念ノ妄執ノ無明ガ晴レズ。一旦生死煩惱ニ隱サレテ知ラヌナ。此法華經ニ汝ガ心ハ妙法蓮華經ノ當體俱體俱用ノ尊。心城ニ住シ給ヘルヲ多寶ノ塔婆ト説レシヲ聞テ。ガニモト心ニ解リヌレバ我身成佛スルナリ(御義上)

これ正しく己心を觀る方法を教へたものなるが。諸佛とは一切の諸佛をいふ。八葉九尊と限りある佛菩薩を云ふ様なれども其實義としては三世十方の一切の諸佛を悉く攝めたるが故に諸佛とい

ふなり。是の如く諸佛が恆に居らるゝ心は城の如しといふ意味なるべし。

八葉九尊は三身の表示なり中央は法身四方は報身四隅は應身なり。

心城の二字に就て心即城か心を置く處の城かの兩義あれども。心即城の義を可とすべし。

寶塔は諸佛を能く居らしむる處。諸佛は居らして貫ふものなれば。諸佛を住居さするが寶塔であつて。此寶塔が即ち心城であるとすれば誠に不思議なもので。茲が妙の妙たる所以であるから。心を置く處の城といふよりは心即城が妙法の義に親しきなり。(委

しくは當體蓮華抄全文と御義口傳上三丁己下を精讀すべし)如此道理であるが實際には上に擧げたる本尊抄の文の如く。此寶塔は

釋迦多寶分身ぶたしんの諸佛が三世常住に安座まします肝心(中心心軸)の城廊であるとの仰せなり。

『薩埵來集之住處』此一句は菩薩寶塔に住する事を釋す。此己心の寶塔は諸佛の住する耳ならず諸の菩薩の來集して住居し玉ふ處であるといふ。一切衆生の胸中の八葉の蓮華は諸菩薩の乗り玉ふ處であるが。此蓮華は誰人の造りしものかといふに天よりも降らず地よりも涌かず。皆これ自分の心城たる心の蓮華が悟の上に表はれて。斯る尊とき蓮葉と菩薩とが現はれるぞとなり。されば

蓮華三昧經リンワサンマイキョウ云歸命本覺心キミノミチノホトケノココロ。法身常住ホウシンジョウヂウ。妙法心蓮臺ミョウホウシンレンダイ。本來具足三身德ホネラミツゾクサンシンドク。三十七尊(金剛界三十七尊)住心城サンジュウシチソンジュウシチソン。心王大日徧照尊シンオウダイニテンサウソン。心數恆沙諸如來シンシュウジョウニヤウ。普門塵數諸三昧フモンチンシュウジョウサンマイ。遠離因果法然具トクリイノカウホフニヤウ。無邊德海本圓滿ムベントクカイホンマウマン。還我項禮心諸佛エンガキョウレイシンジョフツ。

故に聖祖は此文を受て『爰ヲ以テ龍女ガ即身成佛成等正覺ハ南方無垢世界ニテ寶蓮華ニ坐セント云ハ。即チ己ガ心城ノ妙法蓮華經ヲ悟リ顯シテ住セシ也』と仰せられた

是は理性本覺佛も菩薩も本來法爾として心蓮心城に住するのを見ず知らざる吾人は。之を調養して開顯せしむべく妙法を信唱する時既に心城心蓮を開拓するものなれば。吾人の心城は髓に一切諸菩薩を來集し安住せしむるものであるとなり。斯る道理の上に事實は現はれて五百由旬の寶塔となり其中に。

『上行等四菩薩文殊彌勒等四菩薩眷屬居末座迹化他方大小諸菩薩萬民處大地如見雲客月郷』

と來集し居住し玉ふ故に此寶塔は一切の菩薩達が皆御住になる處である。

『五輪本分之全體也』此一句は六凡四聖の色心悉く寶塔に住すが故に。吾々衆生も勿論此寶塔の全體なる事を釋す。此寶塔は法界と吾身を組立たる五輪五大の本體である。五輪とは地水火風空の五大にして本分とは本來の分際。全體とはかけめなき正體といふ事なり。

聖判云法華經ノ題目寶塔ナリ。寶塔又南無妙法蓮華經ナリ。今阿佛上人ノ一身ハ地水火風空ノ五大ナリ。此五大ハ題目ノ五字ナリ。然レバ阿佛房サナガラ寶塔寶塔サナガラ阿佛房。ユレヨリ外才覺無益ナリ(阿佛房抄)

又云塔婆トハ五大所成ナリ五大トハ地水火風空也。之ヲ多寶塔トモ云也法界雖廣此五大ニハ過ザル也(御義下)

これ則ち一個の吾身と廣大の法界とは。根本但一體の五輪なり。

故に吾身の五輪が即多寶の塔なりといふ。

又云寶塔トハ我等ガ五輪五大也。妙法蓮華經ノ見ナレバ十界衆生三千群類皆自身ノ塔婆ヲ見ル也。十界不同ナレドモ己ガ身ヲ見ルハ三千具足ノ塔ヲ見ル也。己ガ心ヲ見ルハ三千具足ノ佛ヲ見ル也（御義下）

これ亦吾人の當體を直に寶塔なりといひ。法界も吾身も皆五輪五大なり。大きく云へば法界小さくいへば吾身なり。『妙法蓮華經ノ見ナレバ』とは。吾身乃ち寶塔なることを見る時は十界衆生の不同はあれども。何れの體を擧ても皆各々三千萬法を具足する全體なり。故に其己心を見れば即ち茲に三千具足の佛の全體を見るなり。

五百由旬の寶塔といふも吾身の現はれたもの故小さき様なるが。

吾身即寶塔寶塔即法界の全體なれば必ずしも小さからず。一往際限ある様に思はるるは衆生の感見かんけんに任せたる談にて。實地には無限無際むげんむがいの法界に遍滿したる寶塔なるべし。此中に住居する諸佛菩薩は吾心の顯はれたるもの故。是も吾心といふ事に拈んで有限なる様に思へども。實には心即諸佛諸佛即法界に遍滿するものなれば廣大無邊の尊體なるべし。是故に其寶塔は法界と吾身の五大の全體が。本來の分際として顯はれたるぞといふ義なり。

聖判云佛ニナル道ハ華嚴ノ唯心法界。三論ノ八不中道。法相唯識。眞言ノ五輪觀等モ。實ニハ叶ベシトモ見エズ。但天台ノ一念三千ユソ佛ニナルベキ道トユソ見ユレ（開目抄下）五輪の名目は眞言宗に專用するが其實義は法華に在るので。其眞言と本宗との五輪觀が如何なる相違あるかを解決したるが此聖判なり。扱所觀の

境(吾身と法界が同一五大とする)は彼此同一にして異なるなければならず。能觀の智慧に於ては彼此大に異なるなり。何となれば彼の五輪觀は本來本有の一念三千を知らぬが故に眞の十界互具も依正不二も立たぬ。所謂假に其義を立てても本無今有で終に無常に歸して。五大と五身と法界と佛と皆各別に離れて居る事になる。それでは斯様な觀解を凝した處で。迷の凡夫はいつ迄も凡夫で終に悟の佛と一如する事は出来ない。徒に他の寶を數ふる如く如何程難有佛や菩薩を見ても知つても我物にはならぬ。

本來本有として五大即十界也。十界互具互融にして法界萬法はこれ吾身なり吾心なりとの。實地の根抵を悟ればこそ轉迷開悟ともなれ。毒藥變じて(凡夫の身意)藥(佛の身意)となる理由も顯れ。吾人が拔苦與樂の目的成滿するのである。金錚論に不曉佛說果

德之意不達佛現互融之由と禁められたるは則ちこの意なり。水を見ても單に水とのみ見ず直に水の一大に他の四大を具すと見。法界の五大と我身の五大とは一體不二である。我身の五大と精神とは矢張一體不二であるとする觀解達しぬれば。茲に始めて物心一元の融通を事實に發現する事が出来る。是の如く能觀の智は法華の一念三千に由らずば。實に叶ふべしとも見えずとの聖決である。彼眞言の五輪觀は有名無實で彌々の極意は我宗の法華經に局る。今經の寶塔涌現の元意は。唯衆生をして本具の寶塔を開悟せしめんが爲に。五百由旬の寶塔と現はれたるなり。吾宗の信徒深く意を留めて終身忘失すること勿れ。

是の如き觀心もて更に其活ける手本たる。事實の寶塔を拜觀せしめられたるが寶塔品の時の大衆なり。故に此寶塔とは徹頭徹尾

實物の七寶塔を説明したもので。其實物を見て他の寶とせぬ用心として。如上觀心を要することなりと心得べきものぞかし。

多寶者乘此塔垂證明釋尊者召分身開塔  
戶並一佛塔中唱付囑有在舉六難九易求  
末法導師

この四句三十八字は今の本尊は別して虛空會の儀式に據ることを明して。其虛空會の最初たる寶塔品の意をのべたるなり。

抑もこの寶塔涌現して釋尊所説の法華經を證明するに二意あり。一往は證前として迹門の大法を在世と正像二千年間の衆生に流通して斷疑生信せしめんが爲なれども。再往は起後として本門の妙法を末法萬年に流通して不信と迷信の邪見を退治せんが爲に現はれた

るものなり。されば四句一々に皆この義を含めて讀者すべし。

初めの一句は多寶如來が寶塔の中より大音聲を出して『妙法華經皆是眞實』と證明せることを釋す。此證明はたゞ既説の迹門流通を勸むるのみにあらず。又密に本門の遠序となる。故に文句云『説迹門近事未用古證若説本門遠事必須先證昔』(昔トハ迹門ナリ)この釋の意は法華經迹門段は教主釋尊二十成道の佛にして。始成正覺の近事の大法なり。之を説くに古佛の證人を用ゆるの要なし。例せば近時の事を説くに古老の證人を勞はす必要なきが如し。

もし法華經本門段を顯説するには。釋尊久遠の實成を示し本因本果の祕法を説くが故。古佛の多寶如來の證明が必要なり。何となれば一會の大衆は皆悉く迹佛の所化にして本佛を知るものなく。

本因本果の祕法に迷惑して信を生し難き故。多寶如來は本佛釋尊の化道を助けんがために此處に出現して。『皆是眞實』の證明をなし給へるものなり。

『先證昔』とは最大の難信たる後説の本門を信ぜしめんがため。先づ難信たる前説の迹門を證明す。此法華經は爾前四十餘年の方便の諸經に異り。『正直捨方便』の實説なるが故言々句句皆これ眞實なりと。これ後の本門の妙法を信ぜしめんため。豫じめ法華經は『正直捨方便』の實説なることを證明して。迹化の大衆に本門の説法を疑はざらしむ下拵へなり。

以上は天台の釋意なるが。日蓮聖人の見解は多寶の證明は。正しく末法の衆生に本門壽量品の南無妙法蓮華經を信ぜしめんが爲なり。(聖判取要抄十丁十一丁ヲ參照セヨ)

『釋尊者召分身開塔戶』この一句は釋尊自ら右の指を以て。寶塔の扉を開きしことをのべたるなり。

此開塔に事相と觀心の二つあり。事相は既に寶塔の空間にあるを見し大衆の中の大樂説菩薩は。釋尊に向つて何卒此塔の扉を開いて。中の多寶如來を拜觀せしめ給へと切に御願をいたしたる故。然らば多寶の誓願であるから十方世界のある我分身諸佛を集めて。其諸佛の贊同を得た上にせねばならぬとて。無數の分身佛を御召しになりて塔を開かせ給ふことを事相の開塔といふ。

次に觀心は所表に約せば。迹門の意は開塔は開權を表し見佛は顯實を表するなり。本門の意は開塔は開迹を表し見佛は顯本を表するなり。開權とは九界衆生法華經に値はざれば九界に佛界の具することを知らず。故に九界の當體より佛體を光顯する事を得ず。

これ無明の煩悩が閉塞すればなり。然るに今法華經に値ひ奉り『欲令衆生開佛知見』の聖語を聽聞して。九界に佛界の具備しあることを信解したるは。即ち無明閉塞の塔戸を開發するなり。之を開權といふ。見佛とは聖判云『凡夫モ亦十界互具ヲ知ラザル故ニ自身ノ佛界顯ハレズ。故ニ阿彌陀如來ノ來迎モナク諸佛如來ノ加護モナシ。譬ヘバ盲人ノ自身ノ影ヲ見ザルガ如シ。今法華經ニ至テ九界ノ佛界ヲ開クガ故ニ。四十餘年ノ菩薩ニ乘六凡始テ自身ノ佛界ヲ見ル。此時此人ノ前ニ始テ佛菩薩ニ乘立ツ』とこれ靈山の大眾塔中の多寶を見るは。即ち自身の佛界を見たることを表示するなり。開迹とは壽量品を聞かざれば九界の衆生自身所具の佛界を始成正覺本無今有の佛界なりと迷惑す。之を元品無明の閉塞とす。然るに今本門に於て久遠實成の本因本果の祕法を聽聞して。自身

所具の佛界は即壽量教主の釋尊なりと信解するを開迹といふ。次に顯本とは壽量品に値ひ奉らざれば。九界の衆生は無常遷滅の佛界を具する事を知ると雖も。元品の無明に閉塞せられて自身に常住不滅の本佛を具する事を知らず。故に亦常住佛を光顯する事を得ず。是を夢中の權果といふ。而るに壽量品に値ひ奉て自身に久遠實成の本佛を具有することを信解するが故。九界の衆生初めて本佛を光顯するなり。之を顯本といふ。塔開けて古佛の顯はるゝは即ちこの義を表するなり。

扱此分身佛に就て議論あり。今集まつた數は釋尊の分身の全數なりや否やといふに。是は迹佛一代の分身なるべく。本佛の分身の全數にはあらず。何となれば今佛白毫の光を以て彼十方の佛を召す。其時彼十方國土の中に於て未顯眞實の權教を演說せる佛も



あり。亦方便説既に終て法華開演の佛もありき。而して其中の法華會座の佛のみを召す。これ今の分身なり。若し久成本佛の分身佛全體を召集せば。逆も三千三百萬億の國土には入りきらぬなり。左の經釋を見よ。

壽量品云自從是來。我常在。此娑婆世界說法教化。亦於餘處百千萬億那由他阿僧祇國導利衆生。文

玄義七云三世益物不可稱計。遍滿法界。無非分身。垂迹開迹。癡迹等益云云。

玄義九云分身已多。當知成佛久矣。如荷積滿池。喻（喻は玄七にあり）

蓮の大池に満るとは。本佛久遠劫來の分身甚だ多くして法界に遍滿するに譬ふるなり。此を以て知るべし。十方法界に満てる

玄義七云譬如下。一蓮華始熟。熟已墮落。沒於泥水。方復生長。乃至成熟。如是展轉。更生更熟。歲月既積。遂遍大池。華田布滿上。

大多數の分身を。何ぞ僅かの三千三百萬億の有限の處に收容する事を得んや。

開目抄云此過去常顯ハル、時諸佛皆釋尊ノ分身ナリ。

（聖判の諸佛とは盡十方法界の一切諸佛を指すにあらず。一代聖教に説き顯はされたる諸佛といふ義なり）

分身は必要ありて生ず。結縁者の所化多きに従つて分身すること。恰も荷の年々増々繁茂して池に充滿するが如しといふ。而して分身の多少に因て結縁衆生の多少を知る。結縁の衆生の多きを以て成佛の久しきを知り。亦化導の度数の多きを知るなり。

寶塔品の三千國土に充ちたる分身中に安養淨土の彌陀ありや否やの論。各々蘭菊其美を競ふが如し。併し聖判の如く過去常顯はれぬれば。彌陀も亦分身なること明かなり。

聖判云今此寶塔品ハ  
コレ壽量品ノ遠序ナ  
リ始成正覺四十餘年  
前ノ釋尊一劫十劫等已  
身ト諸佛ヲ集メテ分  
身ト説カル（開目抄

下此文十劫の二  
字は阿彌陀佛を指す  
なるべし  
又云阿彌陀佛等ノ十  
方ノ諸佛ハ各各國  
ヲ捨テ、靈山虚空會  
ニ詣テ、給ヒ寶樹下ニ  
坐シテ、廣長舌ヲ大梵  
天ニ付給フ(山抄)  
又云久遠實成ノ釋迦  
如來ノ分身ノ阿彌陀  
云々(新編抄)

此聖判の諸佛皆分身といふ事に就て。或人曰く佛とは絶待唯一の久成本佛より外に一もあるべからず他は皆分身なりと。先師曰く皆とは皆多の義一向に他佛なしとの意にはあらず。又遍滿法界の文に就ても同様の疑惑を生ずべきにより注意すべし。而して此兩義をよく了解するには。

立義七云問現見無量佛悉是釋迦分身爲當猶有餘佛餘佛復有分身否

答普賢觀云東方有佛名云善德彼佛亦有分身諸佛若爾者亦有諸佛諸佛亦有分身又神力品云彈指警咳是二音聲遍至十方諸佛世界彼佛四衆遙申供養所散諸物從十方來譬如雲集遍覆此間諸佛之上故知有諸佛諸佛亦有分身也

尙此義に就て山門古來の一義に。本門の意は盡十方の諸佛を以

て分身と名くる義あり。

伊賀抄云本門ノ意ハ三世十方ノ諸佛皆釋尊一佛ナリ。惣シテ諸佛コレナシト雖。諸經ノ說相ニ打マカセテ說ク故ニ。餘佛アル様ニトケリ(叡山先師書也)

啓蒙七十丁云コレ正體ナキ義ナリ。盡十方ノ諸佛ヲ分身トスト。今經何レノ所ニ說ケルヤ。寶塔品ノ來集ハ八方四百萬億等ニ限レリ此分限ノ外豈他佛ニ非スヤ。(とて十ヶ條の破責を加へて)是等ノ道理文證ヲ考ルニ。三世十方ノ諸佛ヲ以テ釋迦分身トスル義ハ太ダ非ナルカ。

而して什師の意見は如何といふに。曰く釋迦の分身已外に諸佛ありと決定する。本佛も迹佛も幾多これあるべく無量無邊なるべし。甲が成佛すれば法界悉く甲の依正となるべく。乙も亦是の如

くにして而も矛盾せず差支ぬ所が所謂妙にして乃ち圓融不思議の徳にあらずや。之を惡の方面から觀れば明かなり。大惡人あつて無間地獄に墮つれば其人の身量無間で地獄界に充滿す。又次の惡人も又其次の惡人も皆然り而も互に差支なき所が惡身惡土の融通にあらずや。之に反比例して善の方の佛界も同格なりと知るべし。

金錒曰問佛成道時土亦成耶成廣狹耶不成有過云云

『有過』とは身土は一法の二義なり。身成じ土成ぜざれば此義を失ふ故に過あるべし。佛身成ずれば身法界に滿ち佛土も亦同じく法界に滿つ。而も身と土と混せず。各各の諸佛も皆法界に滿ちて到らざる處なしと雖。互に自身を失はずこれ圓融不思議の實境なり。

『二佛並塔中唱付囑有在』この一句は釋尊が法華經の功德利益を遠く未來に流通せしめんと思召し。法界に向ひ大音聲を以て『以

妙法華經付屬有在』と詔勅を下された事を述べたるなり。

其大音聲が遙に下方まで徹したといふ事に就て九由來あり。

記八云塔出由故請開。塔開由故見佛。見佛由故請加。得加由故在空。在空由故命衆。命衆由故聲徹。聲徹由故衆至。衆至由故生疑。生疑由故得説。

この由來を推究すれば。寶塔涌現が遂に本門壽量を説き得る基因となりしを了知すべし。而して其付囑有在と詔勅を下されたに就て。『近令有在』と『遠令有在』の二義あり

近令有在 近キ此土ニ 近キ正像二千年ニ 浅近ノ迹門ヲ 迹化菩薩

遠令有在 遠キ十方國土ニ 遠キ末法萬年ニ 深遠ノ本門ヲ 本化菩薩

扱此佛勅に『以妙法華經』とあるは法華一部を指すならん。然るに何故本門に限るといふや。

記八云略舉經題立收一部故謂佛欲以此妙法華經等

此文を以て難す。細目を略して一部の大綱たる題目を擧げなば。其奥に一部乃ち本迹廿八品を含蓄するものを。唯本門に限るといはゞこれ偏見にあらずして何ぞ。

答ふ成程題號は一部を收容せるが。そは本門壽量を説きし後始めて左様になるが。爾の前の迹門の題目には迹門の功德を收めるのみで『後ハ未ダ説カザル故』。本門の功德は收めてない。

記十云不輕已下既惣云法華豈獨在迹若爾爾前諸文亦云法華亦應具二答後未説故。

文の意は壽量品已後の題目には本迹兩門の功德を具すれども。

壽量已前の迹門の題目には本門の功德をば收めず。本迹二經の題目『文辭雖一而義各異』なり。大は小を兼るの方式で。本門の題目にのみ本迹二十八品の功德を收めるのである。されば聖判に『今ハ迹門ヲ開シテ本門ニ攝メテ一妙法トナス』(惣勸文抄)といひ。又本尊抄に題目を擧て『本門ノ肝心』『壽量ノ肝心』と仰せらるゝは。皆此意味を含める故なりと心得べきなり。

『舉六難九易求末法導師』此一句は法華經は甚だ難持が能く之を持て。如來の滅後に弘通すべきことを勸めたのである。乃ち此品に三個の佛勅ある中の第三に當る上の『付囑有在』の文が第一であるから此諷誦には第二を略したるなり。

聖判に『法華經ノ六難九易ヲ辨レバ一切經讀マザルニ隨フベシ』と申されし如く。抑も六難九易は何事ぞといへば。末法惡世に此

經を受持し弘通するは眞に容易の事でない難中の難であるとして。先其至難なる實例を擧て弘經者の覺悟を催すべく教誡し。必ず之を受持し弘通せねばならぬと御勸めを垂れたものである。九易の一々が悉く吾人の考では不可能の難事である。況んや其れ已上の六難をやと躊躇すべき様なるが決して左様ではない。最初から困難なりと決心して大事を踏んで充分覺悟の上でヤレとの聖意なり。法華は難行なり吾等の分齊に叶はずといふ如き僻み根性や臆病では叶ふべからずである。六難九易は經文に分明なるが。今見易き様に列記せば

九易

說餘經如恆沙  
接須彌擲他土  
以足指動大地

六難

滅後能說此經

立有項說餘經

未爲難手把虚空遊行

惡世自他書此經

地置足甲昇梵天

惡世暫讀此經爲難

劫燒負乾草不燒

滅後爲一人說

說八萬法藏十二部經令得六通滅後聽此經問義

說法令得羅漢六通

滅後奉持此經

この九易を行ふ人は通力ある人か無い人かの議論あり。像法道時迹門弘通の叡山の學者ら多くは得道なりといはれた。然るに獨り惠心流は(日蓮日什は留學の時此學係に囑せり)末法應時の本門弘通の見地に近く。通力なき人の所作なりと決せり。聖祖日蓮は佛教最終の審判官として矢張無通の人と定めぬ。扱此六難九易を吾人凡夫の所作として見る時はなかく讀めぬ。

恐れ多いこと乍ら。難としてある方の『惡世ニ暫クモ』といひ『一人ノ爲メニ』といふ此方が餘程易い様に思はれる。然るに聖祖も『只今夢ノ如ク寶塔品ノ意ヲ得タリ』と仰せられた位であつて。逆もく普通なみくくの考で讀めるわけではない。尋常の思ひやりて届く事ではないが。今少しく此推量を語らば正直に法華經を讀み正直に法華經を説くこれが難きなり。正直にやれば人氣に背く之を避けば少しにても其れ丈經を曲げる。故に『法華經ヲ餘人ノ讀候ハ。口バカリ言葉バカリハヨメドモ心ハ讀マズ。心ハヨメドモ身ニヨマズ。色心ニ法共ニアソバサレタルユト貴ク候ヘ』と聖判にあるから。吾々が難くないと思ふは既に不正直になつてゐる。實に正直に讀むことは至難なり。世の一切の賢人學者の説にも反し。國主にも従はず。官民の心にも反し。普く九界衆生の心に背

き。迹佛の心にも隨はず。本佛已外の一切何物にも反對しての行動をとらねばならぬ。誠に難き事なるべし。されば聖祖の直弟すら『日蓮御房ハ師匠ニテオハセドモ餘リニ剛シ。我等ハ柔カニ法華經ヲ弘ムベシ』といはれしかば。斯る人々は謗法の念佛者よりも久しく惡道に墮つべしと呵責せられき。これ獻身弘法の人達にても往々世人の氣に入らんとする根性より。法華經を曲げるものなり正直に讀み難きものなり。是故に佛滅後二千年三國に亙りて。正直に讀み正直に弘めし人は天台。傳教。日蓮の三人のみ。他は皆曲れりと仰せられき。立派に信行した積りの人ですら『尙不稱理』とか『雖讀法華經還死法華心』と呵責せられぬ。隨て日蓮聖人の直弟を経て法孫となりし時代。乃ち日什上人の頃は僧俗皆曲れり(置文。古事記參照)什師の法孫も亦曲りしこと。近年革新中

なるに徴して見るも明かなり。何故曲るかといへば兎角人情の方へ引きつける故……法や佛を或は利用し悪用する等洵に恐ろしき世の中にあらずや。されば

聖判云日本國ニ之を知レル者ハ只日蓮一人ナリ。之ヲ一言モ申出スナラバ。父母兄弟師匠ニ國主ノ王難必ズ來ルベシ。イハズバ慈悲ナキニ似タリ。今生ハ事ナクトモ後生ハ必ズ無間地獄ニ墮ツベシ。言フナラバ三障四魔必ズ競起ルベシト知ヌ。王難等出來ノ時退轉スベクバ一度ニ思止ムベシ。且クヤスラヒシホドニ寶塔品ノ六難九易ユレナリ。我等程ノ小力ノモノ須彌山ハナクトモ。我等程ノ無通ノモノ乾草ヲ負テ劫火ニ燒ズトモ。我等程ノ無智ノモノ恆沙ノ經々ヲバヨミオボウトモ。法華經ハ一句一偈モ末代ニ持テ難シト。説ル、ハユレナルベシ。今度強盛ノ菩提心ヲ起シテ退

轉セシト願シヌ（開日抄上）

讀者宜しく審案熟慮すべし。

『求末法導師』とは本經には末法とはいはずして惡世又は滅後とあるが。滅後は正像二千年も皆滅後なり。惡世とは像法末法の二期何れを指してもいふ。されば經文は意義多含なるが。是ぞ大に仔細ある所で『近令有在。遠令有在』の釋の如く。釋尊は迹化にも本化にも兩方に渡りて仰せられし故。却て一方に言ひきらぬが道理にて『聲徹下方』等の由來より佛意を探尋すれば。末法を指すこと勿論なりとす。

聖判云日蓮ガ淺智ニハ及バザレドモ。恐怖惡世中ノ經文ハ末法ヲ指スナリ。

と佛語從容なるが故に表には末法と仰せられずとも。推理的

に其意味を考れば。正しく惡世又は滅後の文を末法と讀むべき理由あるなり。

されば當品の三ヶの佛勅は釋尊一人の説なれども。其義は多寶如來も分身佛も贊同して居る。多寶は樂ふて聽くことを口にのべずとも心に唱へ。分身は是に與同して居られる。與同せずば去て終ふ筈である。この故に釋尊に由りて宣言せられたる三佛の告勅なりと合點すべし。

### 顯提婆龍女之得益 奏一乘妙法之流通

此二句は提婆品の意をのべたるなり

上の法師品と寶塔品とに於て。如來の滅後に法華經を弘通する人の功德利益が廣大なることを説かれ。三個の詔勅を下されたに就

て。今度は彌々其證據として二個の事實を擧て諫曉せられた。五逆罪を犯せし惡人提婆が昔此經を弘通せし功德に由て。今日此法座に於て天王如來と授記せられしこと。及び八歳の愚痴の龍女が文珠師利の弘通せる此經を聽聞して。忽ち畜身より一躍して即身成佛したること。此二大事實を一會の大衆に示して。荐りに滅後の弘通を獎勵せられたり。

提婆は釋尊の師匠。龍女は文殊の弟子なれば。師弟の利益を擧て。法華を弘める師も之を信受する弟子も。其得益の確實なことを證明せられたが。此品の大意なりとす。

此品の位置に就て古人大に議論せるが。寶塔品の次に在りと決定せしは天台一人なり。餘の人師は皆然らずと雖。前の法師寶塔二品は滅後得益の廣大なることを充分に説明せる故。今度は論よ



の證據で前の道理を事實に證明する必要あるが故。其事實を擧て弘通者も信受者も皆共に饒益あることを示したるなり。されど經文の上に龍女の成佛は分明なるが。提婆の得益は顯著に見えず。果して如何といふに。彼は現在に五逆罪の惡人にして。毫も功德を積まず。既に墮在無間地獄の身にして。猶且つ天王如來と記別せられたり。これ何の功德に因るやといふに。乃ち過去の世に檀王に法華經を授けて。弘通の師となりしことあるを以て。幾萬年後の今日に至るも。其過去の善根が消すして。茲に大罪消滅成佛決定の利益を被りしものなり。

(開目抄下七丁祈勝抄五十一丁及び法華題目抄十丁を參考すべし)

龍女の成佛に就て經文に『知惠利根』とあるから。末法鈍根の女人成佛の手本にならずとの論者あれども。是れは誤解にあらず

んば曲解である。單に其文字耳を見ればいかにも左様かと思はるるふしなきにあらずと雖。この利根とあるは本來の利根でなく。經力を加被して而して後初めて斯様になつたのであるから。此數行の文字は經力得益の科文なるぞかし。

又『變成男子』とあるから。龍女は男子に生れかはりて更に成佛するか如くいふ雜論者もあるが。これ亦思はざるの甚だしきもので。元來如來の十號中に『丈夫』といふ名ありて。如來は男子的雄々しき尊體にましますといふから。龍女の即身成佛を變成男子と異名せられたので。變成男子が則ち即身成佛なのである。將來何れの婦女子成佛するとも不丈夫なる女の佛ある事なし。『聖判云女人ト生レテ百惡身ニ備ルモ此經誹謗ノ咎ナリ』と凡夫の女人誹謗の咎を消滅するが故に成佛す。成佛の上は百惡の身ある事なし。

これ佛界は皆男徳の者計りなることを了知すべきなり。

傳教大師曰此經文明難成趣顯經力用。六趣之中是畜生趣明不善報。男女之中是則女身明不善機。長幼之中是則少女明不久修。雖然妙法華甚深微妙力具得二嚴用。明知法華力用諸經中寶世所希有。この釋の如く經力得益の龍女に三奇あり。女人。少年。畜生これなり。六道の中に畜生は不善の報を明し。男女中に女人は不善の器を明したもので。長幼中には少年であるから。これは修行の久しからざることを明したり。此三元來成佛の出來ないものとしてありしに。今僅かの間にて成佛得脱し『二嚴ノ用ヲ得テ法身ヲ莊レリ』といふ。譬へば法身(本體)は素木像の様なものである。是に彩色等の莊嚴が要る。二嚴の用とは福德莊嚴。智慧莊嚴で。之を報身應身と名け。法身中に沈んでゐるカザリで。龍女は妙法經

力に由て忽ちこのカザリを顯現したのである。當品の肝要は五逆罪の大惡人。無間地獄の提婆も成佛し。畜生であり女身である年少である。愚痴無智の龍女も不思議に得脱する事が出來た事實を示して。滅後末法の女人惡人は必ず此經の功德を以て。成佛の出來る手本としたものなりと心得べし。

### 迹化諸聖求弘經自述惡世之方軌

この二句は勸持品の意を述べたるなり。

聖判云五個ノ鳳詔ニ驚テ勸持品ノ弘經アリ。

法華經を如來滅後末法惡世に弘通せしめんとする。釋尊の慇懃周到なる嚴命に促されて。迹化の菩薩死身弘法の志願を致されたるが當品にて。其衆に五類あり。一には二萬菩薩。二には五百羅漢。

三には八千聲聞。四には六千比丘尼。五には八十萬億菩薩なり。此中の二萬菩薩と八十萬億菩薩とが。此土の末法惡世に弘通を志願し。他は皆惡世の障難を恐れて。安樂なる他方世界を願ひぬ。而してこの二萬菩薩はいかなる方かといへば。法師品の初に於て『爾時世尊因藥王菩薩告八萬菩薩』と御呼になつた八萬人中の二萬なり。故に法師品の時既に釋尊の命令を被むりしゆゑ。之を別命の人と申し。同じく列席したれども敢て指命されぬ。數多の菩薩達に卒先して第一に誓願を發したるなり。又八十萬億の菩薩は法師品の時にも居られたが。八萬の菩薩の如く特命もせられず。嘿聽して居たから。當品にても一寸後れて出でたるなり。經文に『爾時世尊視八十萬億菩薩』とあるから。汝等も當に發誓すべしと思召された氣合に由て。後ればせ乍ら驀然と進み出でたる様に見

ゆる。然るに二萬菩薩は別命で任務が重きゆる。自ら進んで惡世弘通の方軌をのべた。弟子から師匠に向てのべたのであるが。是は既に其方式を法師品で承知して居るからである。方軌とは惡世の弘通者の服務規律で。衣座室の三軌といつて。一には忍衣を着て法を弘めよ。二には慈悲の室に入て法を弘めよ。三には法空の座に坐して法を弘めよといふので。此規律は攝受折伏何れの方にも必要缺くべからざるものなるゆる。之を法師品で八萬の菩薩に嚴命した。八十萬億菩薩は傍聽者の位置に在つた。されば五個の鳳詔に驚いた一會大衆の中より。まづ第一に二萬の菩薩が進みいで。大忍力を懷いて死身弘法を誓ふとき。三軌中の一軌丈をのべて。二と三をばのべないが。是は恐らく經文が略儀になつてゐるものならん。

然るに傍聴者たりし八十萬億菩薩は後れたが。堂々として一齊に進み出でて。有名なる廿行の偈文をもて具さに惡世弘通の方軌をのべられた。此廿行の偈文に就て

文句八云前ノ十七行ハ忍衣ヲ被リテ經ヲ弘ム。次ノ一行ハ室ニ入テ經ヲ弘ム。又一行ハ座ニ坐シテ經ヲ弘ム。後ノ一行ハ惣シテ請加ヲ結ス

斯の如く廿行の偈文は善く法師品の三軌に契合するなり。三軌の中で慈悲心や柔和忍辱心は推知し得べきも。法空座とはどんなものか。これは無着なり。物に執着せぬなり。而して過去の不輕菩薩が折伏弘通の時もこの三軌に則りし故。攝受門にのみならず折伏の行者も必要とすべき證據となるなり。殊に末法に三軌を用ゐる理由は。後の惡世は人氣極めて悪しき時ゆゑ。最初から充分

に之を承知して置かねば叶はぬなり。

聖判云ヨキ師トヨキ檀那トヨキ法ト。此三寄合テ祈ヲ成就シ國土ノ大難ヲモ拂フベキナリ。ヨキ師トハ指タル世間ノ失無シテ諍ナク。少欲知足ニシテ慈悲有ン僧ノ。經文ニ任セテ法華經ヲ讀持テ。人ヲモ勸メテ持タシメン僧ヲ。佛ハ一切ノ僧ノ中ニ吉キ第一ノ法師ナリト讚ラレタリ。

慈悲ありて經文に其身と意とを一切任せ。寸毫の人我法我なく布教傳道するにあらずんば。現當の祈願も成就せぬぞとなり。聖判照々として惡世此土の弘通者を露現せしめたるを見る。

文殊者開章問請方軌世尊者說四法勸始行

これは安樂行品の意をのべたるなり。

上の勸持品に於て五類衆の中の。第一の一萬菩薩と。第五の八十萬億の菩薩は。位高く有力な御方ゆゑ。惡世の弘通を自ら任ずるに反して。第二の五百羅漢と。第三の八千聲聞と。第四の六千比丘比丘尼は。何れも位卑き二乗の人々なれば。到底末法三類の強敵には堪へざるゆゑ。退いて他方世界を願ひしかば。之を逐一謹聽して。吾らは如何にせんかと。進退に躊躇する初心始行の菩薩衆あり。此衆の爲に。何とかして此國に在て安樂に弘通する方法はあるまいかと。文殊師利菩薩が釋尊に問ひ奉りしかば。此初心始行の菩薩の爲に。四安樂行と申す法則を説かれたるが當品なり。

但し本文に『文殊者開章問請方軌』とある問の字は直筆にも其通

りあるが。どうも讀み難い。『章ヲ開スルノ問』といつても分らぬ故。恐らくは門の字の寫し誤りならん。文句の中に『標四行章門』といふことあり。これが本據なるべきか。章門とは章即門なり。四行(身。口。意。誓願)の門別なる故に章門といふ。方軌の軌の字も直筆に軌に作れども。是亦誤りならんか。

今始行の方軌を請問するは。則ちこれ四行の章門を開きたるなり。是が滅後弘通の規則である。前には三軌。今度は四安樂を御説になつた。開とは文殊が開くので釋尊ではない。此理由は經文の成立からいはんに。勸持品五類衆の外に數多の人々が居られるが。其連中一會の光景を知見して。皆佛意を奉じて弘通せんと欲する志はあれども。惡世の障難を怖れて逡巡し居る故。文殊菩薩が之を見て氣の毒がり。此軟派の人々が弘通の出来る方法を開示

して貰ひたいと釋尊に御願申した故。四法を説き與へ給へり。四法とは身。口。意。誓願。の四安樂行にて。これは内に自ら堅く三業を守て。外に他の求に應じて此經を説く方法規則なり。今圖解せん。

### 身安樂

行處——住忍辱地觀諸法實相

近處

遠離十惱亂——(一)威勢(二)邪人法(三)險峻(四)旃陀羅(五)二乘  
閑處攝心——(六)愁想(七)不男(八)殺害(九)嫌(十)毒藥少年  
觀十八空

### 口安樂

止行——(一)不說人法過(二)不輕慢法師  
觀行——不以小乘法答但說大乘

### 意安樂

止行

(一)不疾詔(二)不輕罵  
(三)不惱亂(四)不諍競

觀行

衆生起慈悲心  
佛起慈父心  
菩薩起師想  
於衆生平等説

### 誓願安樂

誓境——(一)慈誓境(二)悲誓境  
誓由——(一)慈誓由(二)悲誓由  
正立誓——我將菩提時引之合住法

この四安樂行は初心修行として。新發意の菩薩のために説かれたものなるが。像法のためか末法のためかに就て議論あり。若し像法とせば。經文には『末法』といひ『來世』といふ像法といふべからず。又聖祖往々之を引て第五の五百歳に同ず。故に像法といふべからず。若し末法といはゞ。差支あり。天台は像法に於て盛に此行を修行せられたり。又聖判に『然ルニ攝受タル四安樂ノ修行ナ今時行ズルナラバ。冬種ナ下シテ春菓ヲ求ムルモノニアラズヤ。鶏ノ曉ニ鳴クハ用ナリ宵ニ鳴クハ物怪ナリ(如説修行抄)とある。然れば天台は像法に出で、四安樂行を實行し。日蓮聖人は末法に現はれて之を不必要なりと唱るに似たり。其正意果して何れにあ

りや。

これ教相上勸持品に於て深位の菩薩は惡世に忍んで弘通すべきを誓ひ。文殊は初心始行の爲に惡世に安樂に此法を弘むべき方軌を問ふ。釋尊は是に答へて四安樂の方軌を説き給ふ。この故に經文に『惡世末法』とあるなり。されば惡世末法中に三類強敵を對向者として。折伏弘通すべきこと。勸持品廿行の偈文の如くなるが。其中に少分は迹門攝受の機あるが故に。佛之に寄て今の迹門流通の正軌を示すなり。由て大體に於て。末法は本門を用ゐて折伏弘通すべく。像法は迹門を攝受の四安樂行もて弘通すべき時なるが。細論すれば多分は折伏少分は攝受のものありと。傍正を立て、見るべし。折伏を受る人は本未有善の機にして。末法は大體に於て此本未の人が生れる時なり。又攝受を受る人は本已有善の機にし

て。像法は大體に此人の生れる時なるべし。像末互に少數例外の者無きにあらず。これ末法に本已有善四安樂行の人も有る所以なりと知るべし。されば像法の時に専ら四安樂行を説て。衆生を攝收したるは誠に至當の事にて。天台は専ら之を奉行せり。故に天台は此品を要品とせられたるなり。又末法に専ら勸持品の折伏行を立て、衆生を教導したるは誠に適切の事にして。日蓮聖人は専ら之を實行せられたり。故に『勸持品廿行ノ偈ハ日蓮此國ニ生レズバ世尊ハ殆ド虚妄ノ人ナルベシ』とまで罵言せられて。日蓮が佛敕使たることを證明せる。釋尊の未來記なりと仰せられたり。開目抄に『惡國攝受謗國折伏』との聖判あり留意すべし。最も是は像末を分けたのではなくして。末法中に並んで惡國と謗國ありとの義なるが。之を上の修行抄の文意にアテハメテ時の前後を分

つは誤りなり。而して末法に四安樂行の必要なる理由は。かの法師品勸持品の三軌は末法の爲なること勿論なり。而して此三軌と當品の四安樂と義を推して考ふれば同一意味に歸着するなり。身安樂行中の十惱亂の中の第五を見よ。これは三類敵人中第二第三の僧衆に當るなり。遠離とは攝受は避け折伏は觸るゝなり。第五を除いて餘の九は。三類の第一俗衆邪人に當る。又口安樂行の中に四つある中の第二不輕慢法師は。道門増上慢に當る。餘の三は三類に互る。次に意安樂行の第二は但僧を指す。他の三は三類に互る。又誓願安樂の誓境に二つある中の初の慈境は。三類に通ず。第二の悲境は但俗衆なり。又誓由に二つあり。則ち向の二境に對して起る中に於て。慈誓由に執權誘實の人を説くこと經釋俱に分明なり。これ四行中の所離所止等の境は皆上の三類の過惡を出て

ず。斯の如く三類の居る時に之を避けて行せよとのことゆゑ。末法の時なり。三軌四安樂同一義に歸す。但異なるは忍衣を着て觸るか。着ずして避けるかの差あるのみ。初心は避け深位は觸るゝなり。而も末代は避けることが少分なりといふことは確實なり。下種結縁の者は少なく誘法の者は多きが故に。日蓮聖人は此安樂行品と五五百歳の文とを引合せて。何れも末法に必要なことを明されたり。

### 是則迹門流通之說相也

この一句は寶塔品より安樂行品に至る。四品の總結の文なり。何故に此四品を擧たかといふに。聽て本門本尊を顯はす遠由となればなり。所依の經。能依の法と申して。經に依て法が現はれ



る。其法が肝心なり。其法を現はす經に於て傍正あり。妙法を顯はすに迹門は傍。本門は正なり。一部本迹廿八品皆妙法を顯はす爲の經文なれども。其中に傍正あることを示す爲に『是則迹門流通之說相也』と仰せられたり。

次止過八恆沙之弘經 召本化寂光之地涌因 彌勒不知之疑問 顯釋尊久成之遠本

この四句は本門の初めなる涌出品の意をのべたるなり。

涌出品は前半品は本門の序分にして。後半品は正宗の一分なれば。大事の法門顯はれけるゆゑ。聖判にも『涌出壽量ノ二品ヲ除テハ餘ハ皆始成ヲ存セリ』と申されぬ。

『次止過八恆沙之弘經』次とは順序にて上の五ヶの鳳詔に次で

なり。過八恆沙は他方世界より來りし菩薩にして其數無量なり。天竺に四大河中の第一として有名なる恆河を。八つ合せたにも過ぎ。九つには少し足らぬといふ。凡智を以ては數へられぬ澤山の菩薩が一同に。釋尊の滅後惡世の弘經の功德高大なるを聽いて感激の餘り。我本の世界には還らず。此土に止まりて死身弘法せんと。請願したるに。釋尊は仔細ありて御許しなく。差止められたるなり。

『召本化寂光之地涌』本化とは本佛の化導を受たる弟子にして。寂光淨土に居住せるが。釋尊の御召に應じて。忽ち大地の下方より涌出したるなり。

菩薩に就て二萬八萬は迹化菩薩。過八恆沙は他方來菩薩。六萬恆河沙は本化菩薩。この外に迹化淺位の菩薩もあり。而して是等

の菩薩を止召するに就て。涌出序の三義といふことあり。圖に示さん。

他方請弘經

涌出序三如來不許

〔如來不許〕〔別命本化〕止

下方涌出

止めると同時に召す。一方を召すが故に一方を止むるなり。是故に止召と云ふ。今はこの三科中の一科だけ擧てあれども。其止められたるは弘經を請はれたるに因る。又下方涌出も召された故に出でたるなり。是故に今の二句は本門序分全體をあげたる巧妙の句なり。

さて止召に就て前二後三の釋あり。圖解すれば。

(1) 他方菩薩各自有已

(1) 是我弟子應弘我法

聖判云爾時佛告諸菩薩摩訶薩衆。止善男子不須汝等護持此經等云云。自法師已下五品經文前後水火也。寶塔品末云以大音聲普告四衆。誰能於此娑婆國土廣說妙法華經等云云。設雖爲教主一佛獎勸之。藥王等大菩薩梵

前

任住此土廢彼利益

(2) 於此土結緣事淺雖欲宣授必無巨益

(3) 若復許之則不得召

下方菩薩下方菩薩若不來此迹不得破遠本不得顯

後

(2) 緣以深厚徧此土益徧他方土益

(3) 開近顯遠得

前三は止の方で後二は召の方なり。

さて茲に疑問とすべきは。此前三後三の釋を聞て。勸持品の迹化二萬と八萬の菩薩は無關係の様に見ゆるが。經文は略説ゆる表には見えねども。この止めて許さぬといふ教相中に。自ら迹化二萬八萬の菩薩の願ひをも許さぬといふことを含む。是が亦大事

帝日月四天等可重之處。多寶佛十方諸佛爲客佛諫曉之。諸菩薩等聞此慇懃付屬。立我不愛身命誓言。此等偏爲叶佛意也。而須臾之間佛語相違。制止過八恆沙此土弘經。進退維谷不及凡智。天台智者大師。作前三後三六釋。會之所詮迹化他方大菩薩等以我內證壽量品不可授與。末法初謗法國惡機故止之。召地涌千界大菩薩。壽量品肝心以妙法蓮華經五字。令授與閻浮衆生也。

なり。

聖判云日蓮門下ノ大事ハ涌出品前三後三ノ釋ナリ。ユノ釋ナクンバ本化迹化ノ不同。像法付囑末法付囑。本門迹門等ノ起盡ユレアルベカラズ。既ニ止善男子ノ止ノ字ハ日蓮門下ノ大事ナリ。秘スベシ々々々。惣シテ止ノ一字ハ門下ノ明鏡中ノ明鏡ナリ。口外詮ナシ。上行菩薩等ヲ除テハ惣シテ餘ノ菩薩ヲバ悉ク止ノ一字ヲ以テ成敗セリ云云(日向記)

是に由て見れば。止の字は本化已外惣じて一切の迹化も他方も。皆悉くこの一字を以て成敗したるものであるが。尙道理を以て上記前三後三の釋を下より押し考れば。『是我弟子』には弘法を許し。『非我弟子者』には許さぬ。迹化は我弟子か否かを考れば直ぐ分る。佛に迹佛本佛の二種ありて。迹佛の化導を受たるが迹化菩薩。

薩。本佛の化導を受たるが本化の菩薩なり。

聖判云是我弟子應弘我法事。仰云我弟子トハ上行菩薩ナリ。我法トハ南無妙法蓮華經ナリ。權教乃至始覺等ハ隨他意ナレバ他ノ法ナリ。サテユノ題目ノ五字ハ。五百塵點已來證得シ給ヘル法體ナリ。故ニ我法ト釋セリ。

我弟子とは本化に限る。我法は本門妙法に局る。故に他方菩薩のみならず。迹化の諸菩薩も皆同様に『非我弟子』なること分明なり。

第二の下段釋から押せば。本化菩薩は此國土に縁深厚なること五百塵點劫來の關係あれど。迹化菩薩は結縁淺く關係が薄いから。之を止めたるなり。

第三の後釋よりいへば。本化菩薩が現はれねば釋尊の本壽を明

聖判云地涌千界大菩薩一住娑婆世界多塵劫也二隨逐釋尊自久遠已來初發心弟子也三娑婆世界衆生最初下種菩薩也如レ是等宿緣之方便超過諸大菩薩(大田抄)

すことが出来ぬ。恰も教師に附隨する生徒の格に由て先生の高下を判定する様に。小學生が附けば其先生。中學生が隨てるのは其先生。大學生の附隨するのは大學の先生といふ鹽梅に。どうしても本化の大學生が隨て居らねば。其大學先生たることが分らぬ。これが分らねば開近顯遠といふことが出来ないのである。

是の如く後三の釋を以て前三の釋を照鑒すれば。自ら迹化二萬八萬の菩薩も。皆悉く止の字に押しとめられたことが分ると同時に。唯但本化菩薩のみに限りて。此土の弘經を許されたといふ事が。早くも序分の時に其意が含んである。

『彌勒不知』の一句は本門の序分乃ち涌出品の前半を指し。『釋尊久成の一句は』涌出品の後半と壽量品に互り。本門の正宗分に入る。是に二つあり。略開近顯遠と廣開近顯遠となり。略は涌出品

後半にて。廣は壽量品なるが。今の文は兩方に通すべしと雖。且らく涌出品に止めて略開近顯遠として見るべく。此二句より次の句を正しく壽量のことと見るべし。

『彌勒不知』とは何者が不知なりや曰く本化菩薩なり。本經に『乃不識一人』と申して。一向知らぬ菩薩が無量に現はれた故疑を起した。此菩薩の師匠はドナタで。何の用向があつて。何處から來れるやと。三箇條の疑念を懷いた。佛の候補者たる大菩薩がどうして知らぬかといふに。文句九に四悉を以て釋せり。一には。彌勒曰く予は釋尊成道已後の事は一切承知してゐる。十方淨土から來集せる菩薩達無量にして限る可からずと雖。我補處の智力を以て悉く見悉く知てゐる。又自ら十方へ遊行して諸佛の大衆たる菩薩達は皆快く知られてゐる。然るに今度來られた菩薩は未だ一人

をも識らず(世界)二には。彌勒は後番の末學者なれば本化の前進先達を識らず。後は前を知らざる故に乃不識一人と云ふ(爲人)五十年前の學生をば今日の書生が見もせず知りもせぬと同様ならん。三には境界が違て居る故に知らず。境界とは一は眞身二は應身なり。今の本化菩薩は本門の實相の眞から應現して。十方に別頭の教化を布ける應なり。同じ菩薩とはいひ。彌勒等は迹門の實相より應現して未開迹の土に遊行す。是の知く本化の眞應と迹化彌勒等の眞應とは違ふから知れぬのである(對治)四には密に壽量を開く故に不知なり。其理由は彌勒の間に。何の因縁に由て來れるやと疑ふ。佛と本化は分りきつてゐる。此菩薩が來ねば本門壽量を説く事が出來ないからである。この事を本化菩薩已下は一切不知である。これ秘密に壽量を開くのである。故に彌勒等は知らざる

なり(第一義) (悉且) (取意)

此密開壽量に就て大事あり。

妙樂大師云約彌勒不識邊無四悉益由問故識識即四益云云記九云密開壽量是第一義者是一部最極之理豈非第一文密開壽量は事相なるが。この遠壽は是れ但事の遠壽のみにあらず。法華一部の骨髓たる十界皆成と。一念三千の基礎なることを。注意したるものなり。

『顯釋尊久成之遠本』とは。この科文を示さば。

正開近顯遠

略涌出後半品

正說段二惣授法身記

彌勒申領解

分別前半品

『釋尊久成之遠本』とは詳には。釋尊始成の迹佛を開て。とあるを略したるなり。本經に『世尊亦如是得道來甚近』といふこれなり。遠本とは經文には『遠』で義には本となる『久遠若此』『甚大久遠』これが本據なり。遠近は横豎に通ずれども。其義は横の空間にはあらずして豎の時間の方なり。義を以て遠を呼て本とし。近を呼て迹とす。されば今の諷誦章には義と經とを合せて『遠本』と擧たるなり。開迹顯本に就て。本門壽量と諸餘の經典との相違あり。餘經の本迹は迦耶城降誕の釋尊一世に就て之を立つる故。乃ち檀特山に入り修養の結果として。廓然と御覺りを開き給へる其時の佛身を以て本とし。其より已後。劣應身。勝應身。の形を現して。衆生を化度し給へる佛身を迹とす。本門壽量の本迹は諸經に明す所の本佛も迹佛も一切皆迹となり。久遠實成の本覺を本とするなり。

又此本迹に就て單に釋尊の本迹のみならず。經々の本迹も明かになるが。先づ形聲の二益あることから考ふべし。形益は垂迹の釋尊と異り。本門の釋尊は其分身佛の無量なること。荷の積んで池に滿つ諭の如く。至れり盡せりの巨益を一切衆生に與ふるものなるが。聲益の方は本尊抄五重二段の極點に於て。

又本門ニ於テ序正流通アリ。過古ノ大通佛ノ法華經ヨリ乃至現在ノ華嚴經。乃至迹門十四品涅槃經等ノ一代五十餘年ノ諸經。十方三世諸佛ノ微塵ノ經々ハ皆壽量ノ序分ナリ。

これ聲益を明せるなり。十方三世諸佛の經々として。五百塵點を除て。外の一切の諸佛の群經。悉く壽量品の序分なりと判じ給ふ。序とは迹を施す邊に従ふて序とす。壽量品は正開顯の邊に約して正宗とす。其外は皆施迹の經々なる故。畢竟するに十方三世の諸

佛の微塵の經々は。久遠本佛の一如來の說法である。十方三世の諸佛は皆久成本佛の垂迹佛なるが故なり。一月萬影の譬の如し。實に甚大なり。久遠根本の一つから出て。又元の本に歸す。是が聲益の廣大なるを現はしたるものなり。

諸佛には皆三密の力あれども。本佛の三密力は特別殊勝である。本佛の身密を言はゞ。分身無量にして十方法界に遍滿す。是れ諸佛に超過す。次に意密を言はゞ十方三世の諸佛の鑒機三昧は。皆本佛意密の力用に歸す。是れ諸佛に超過する所以なり。第三に口密を言はゞ。十方三世の微塵經々皆本門壽量の一品に歸入す。當に知べし壽量一品大切なることを。これが皆久遠に歸着す。一切の分身は身密たる久遠本佛に。一切經々は口密たる本門壽量品に。一切諸佛の鑒機三昧は。意密たる久遠本佛のソレに結歸して終ふ

ものなり。

故に開迹顯本といふは。單に佛身のみならず。これと同時に經教の開迹顯本が出来る。この人法共の開迹顯本が乃ち「密開壽量、是第一義」の釋を作る理由とす。

顯本の正意に惣別あり。惣じては三身の顯本。別しては久成報身の顯本をあらはす。顯誦章の初には「顯釋尊久成之遠本」と擧げ「宣三身即一之應用」と云ふ。此文に望むに「遠本」とは別して自受用を顯はすに在る事を示す。故に後の本門の二佛を釋する中に「開遠本者顯三身即一之自受用」と明示し給ふ。前後相映じて拜見すべし。此は文句に於て義便文會あるが故。正在報身といふ義便は。報身中に自受用他受用あり。圖解すれば。

自性清淨

○法

離垢妙極境

冥合

○報

自受用智

他受用

○應

勝

劣

應身

この最初の自性清淨は。諸經常談の法身常住にして。智が隠れてゐる。此中の不思議の智が発現して。境智冥合した所が衆生濟度に現はれたので。是が大事なり。本門壽量品はこの自受用報身が正意である。他受用の智は應身に屬す。自分に收めたる智は自受用にして。他の爲に説き與ふる智が他受用なり。之を義に叶ふと釋せり。文會とは壽量品に『我成佛已來』をば五百塵點劫とある所による。自然的でない。成佛の成の字に。能成所成と云ふ事あり。所成は法身。能成は報身なり。法身の境と報身の智と。境智

冥合したるを能成所成と云ふ。法報合するが故三世に衆生を利益す。三世益物の應用は境智冥合より現はるゝなり。壽量の顯本は釋尊の成道によせて。無作三身の法體を説き顯はしたるものなり。故に

聖判云文句九云今正詮量本地三佛功德。故言如來壽量品矣。此品題目日蓮當身大事也。神力品付屬是也。如來者釋尊。總十方三世諸佛也。別本地無作三身也。乃至無作三身寶號南無妙法蓮華經云也。壽量品事三大事者是也(御義下)此文句と御義とを對照するに。文句には但『本地三佛』と云ひ。御義には『本地無作三身』と云ふ。これ天台日蓮兩聖の内證は同じけれども。像法の導師と末法の導師と異なる故。天台は但教相に依て釋を設け。聖祖は深く壽量の文底を穿て妙判し給ふ。故に本地の語を穿て。無作の言を



置き給ふ。又『三佛功德』といふ語を穿て。無作三身の寶號と示し給ふ。其故は三世十方諸佛の三身の功德は。本地一佛の三身に歸入するが如く。一切有作の功德は皆悉く無作の本體より出現し。亦無作の本體に歸入するなり。壽量品の極意は始覺を開して本覺を顯すに在り。『聖判云妙法蓮華經五字非經文非其義唯一部意耳』此故に題目には萬法を含むなり『意』とは實體なり。壽量品の經文及經義は。此本覺無作三身の實體を詮量したる金言なり。題目は詮量せられたる實物實體なり。嗚呼本化の聖判誰れか信伏せざるべけんや。

**宣三身即一之應用顯塵點久遠之大悲**

これは佛教の中心にして。法華經の神髓たる。壽量品の正意を

天上界ニ如意珠ノト云  
珍寶アリ妙淨妙人  
クニシテ能アリノ  
ノ意ニ稱フテ淨妙  
色ノ香味觸ヲ雨降  
又金銀等ノ七寶降  
所ノ種々ノ寶珠ノ  
内ニ蓄積ノタメニ  
ズ外ヨリ入レタル  
モアヨリ入レタル  
テモ人ノ意ニ隨テ  
恆ニ降ラシキニ多  
クモ降ラシキニ多  
雨珠全體ノ光輝ナ  
此一見ノ光輝ナリ  
シ此一見ノ光輝ナリ  
リ三珠ナレドモ但  
如意珠ナレドモ但  
法

のべたるなり。

『三身即一』とは。法身と報身と應身と。この三身の互具互融することを示したので。應用とは應は應身である。

三身に體用あり。今應身を用として。體は何かといふに。法報二身冥合してゐる所が體なり。然るに法報二身合一してゐるのを體とし。應身を用とする時は。三身即一にならぬ様だが。其法報冥合してゐる體中に。天然として應本といふものを具せり。故に法報冥合體は一にして即三である。珠。光。寶。の譬の如し。

此應本が機根に應じて用らいてくるところを應用といふ。これは應本ばかりでなく。冥合體の全體が一つに用らくなり。故に體用不二の體。又は體用不二の用といふ。則ち俱體俱用と申すことを巧みに七字もて明された。俱體の體。俱體の用といはねば義が

身ニ譬へ光輝ハ報身ニ譬へ種々ノ寶ハ應本ニ譬フ(止觀五取意)

隠れる。用は遷滅がある常住ではないが。體は自ら常住なものである(但し體中の用。即ち應本なるものは。體と俱に常住なり。亦用中の體は用と俱にして自ら遷滅あるなり)體は不見。用は見なり。見ゆる用を推して。不見の體の徳を量る。用の效能をあぐるは。所詮體の徳を示す爲なり。釋に『本地三佛ノ功德ヲ量ル』とは體なり。この體の效能を量る爲に。應用の效を説くなり。例せば人の履歴を書き現はす。此用らきに由て。本體の偉大なることを知了するが如し。聖祖の御事蹟を説て。其人格の高さを知らしむといふ様に。三身即一の應用をのぶるは。本地三佛體の徳を現はさんが爲なり。本地實性の體の尊き事は。必ず長遠壽命といふ用に由て現はる。この故に三世益物の大慈悲を以て。本地無作三身(體)の功德を現はす。

三身即一といふことは。一切の圓教に説くが。今の壽量品に顯はす三身即一と。どこが違ふやといふに。

注法華玄義要路云問實相爲體爲性爲修答迹門從性起修以修證性爲體本門如來久證實相爲體故體云妙法妙法即修性。修性即實相。實相即通迹本二門也。

この文に由て考れば分る。問の意を言はゞ。諸佛の應用は實相を體とし給ふといふが。其實相には性徳として。未だ境知冥合せざる實相と。又修徳として已に性の境と修の智と冥合せる實相と二者あるが。此二者の中何れを取て體とするや。是の如く實相の語には自ら此二義あるが故。此問が起る。實相を體とするは修か性か。性は理。修は事なり。修は智。性は境なり。實相を體とするは。どこをとるや。

答の意を言はゞ。まづ迹門の意は。無始より性徳の理ありて。其理内に自ら智性を具す。譬へば水の内に自から波と成る可き性を具ふるが如し。而して後其性徳の理は。外縁に引かれて。理内の智性發現す。此を『從性起修』と釋す。將又其發現せる智は還て理性を照す。故に此時理性に境の名を附し。智に修の名を附するなり。此照す事彌よ究竟すれば。理と智と一體不二となる。此を境智冥合と名く。『以修證性』とは即境智冥合を釋せるなり。此を諸佛應用の體とす。而れば此冥合は無始の理と。有始の智と冥合せるものなり。譬へば龜と蜉蝣との和合の如し。豈無常を免れざらんや。是の如くの體を以て應用を起せる諸佛は。其諸佛の體用俱に無常なるべし。故に爾前迹門の諸佛の三身即一は。皆夢の如し。此を『本無今有ノ失』又は『有名無實三身即一』といふなり。

聖祖が『水中ノ月根ナシ草ノ波ノ上ニ浮ベルガ如シ』と示されたるも此謂なり。

水内の波性は水面に發現せざる以上は波の功能なきが如く。理内の智性は智の功能なし。境智冥合の智は理智一體不二にして智に非ず理に非ず。不可思議の大功能あり。此大功能に添ふて。應本は存在するものなり。

依て理内に無始の智性ありといふも。夫は唯名のみにして實功なし。爾前迹門の三身中に無始常住なるものは。唯一つの法身のみ。『法身常住諸經常談』とは是謂なり。『聖祖云法華前後ノ諸大乘經。一字一句トモナク。法身ノ無始無終ハ説トモ。應身報身の顯本ハ説レズ。廣博ノ爾前。迹門。本門。涅槃等ノ諸大乘經ヲ捨テテ。但涌出壽量ノ二品ニハ付ベキ』聖判明々として満月の暗夜を

照すが如し。伏て是を思へ。

次に本門の意を言はゞ。無作三身と申して。無始より境智冥合して冥合體中自から應本を有し。三身俱に無始より互具互融せるなり。此を五百塵點劫來應用せる。三世益物の釋尊の本體とす。

『如來久證ノ實相』とは即ち此義なり。『本地難思ノ境智ノ妙法ハ迹佛等ノ不及思慮』と聖判し給ふは是謂なり。妙法とは三身互具互融の不可思議を讚美す。而るに迹門も一往三身の互具互融あれば。妙法の稱歎あれども。本門に望むれば其徳なし。

立義七云問破十麤顯十妙則無明惑盡一實理彰今更破迹妙爲麤顯本爲妙破何惑顯何理答無明重數甚多實相海深無量如此破顯無咎云云『これ迹の妙は本の妙に望むれば却て麤となる證據なり。又修性と境智とは名異にして義同じ。實相と言へば修も性も

俱に實相と名く。故に實相を體と爲と言はゞ修。性を體と爲すと言ふ義になる。修理即境智なれば亦境智を體と爲すと言ふ義になる。境智を體と爲すと言はゞ。本門も迹門も體は境智なるが故。實相を體と爲すと言はゞ迹本に通ずるなり。而して其境智の冥合が成立して居る所を妙法と云ふ。然るに迹の冥合は本無今有の失有り。常住ならざる故。妙法の功破れて無きが故。迹佛の體を妙法と言はずして。但實相といふなり。此に於て本佛の體獨り妙法といふ。『故體云妙法等』の釋は即此謂なり。今此本門の應用を三世益物といふ。『自我得佛來。所經諸劫數。無量百千萬。億載阿僧祇。常說法教化。無數億衆生』とあるから。暫く天竺出現の釋尊が五十年間。大小權實本迹の諸經を示して。或は種熟脫等の三益に互る所を數ふるすら猶數へされぬ。亦形を示せば降誕の時『天

上天下唯我獨尊』といふを初めとして。終り涅槃に至るまで。其利益甚だ多し。然れども是はホンノ久遠劫中の。一世一番の利益のみ。而して此娑婆の中の佛事を數ふるすら無量なり。況や二乗や菩薩の淨土及び三界六道に互る益物の廣大なることをや。實に無量無邊なり。此應用を發動する其本體が無くば現はれぬ。是に由て大應用の本體あることを推量すべし。此れ宗祖獨特の『文底祕沈』といふ宗旨の眼目なり。

『顯塵點久遠之大悲』とは久遠五百塵點劫の大慈悲を顯はしたとの事。外に利益を現はすは内に慈悲あるに由る。其慈悲とは此れ即ち應本として應用の本源である。應用は利益である。外の利益をのべて内の慈悲を顯はしたものなり。  
記一云諸佛神變皆本慈故一切法皆由慈立

神變トハ即チ應用ナ  
リ神通力ヲ以テ形ヲ  
示シテ利益ヲ示スル  
ヲ應ジテ利益ヲ示ス  
生ニ應ジテ利益ヲ示  
ヲイフ本經ニ或示  
己身或示他身或示  
則チ神變ナリトハ是  
一切法トハ十界ノ依  
正ナリ  
或示己身佛界  
或示他身九界  
或示己身正報  
或示他身依報

これ即ち慈悲は本源にして。神變は外面に垂れた利益なりとの義なり。神變とは應用である。神通力を以て形を十界に變じ。十界の衆生に應同して利益するをいふ。本經に『或示己身或示他身或示己事或示他事』とは即ち神變なり。一切法とは十界の依正なり。乃ち或示己身は佛界。或示他身は九界。或示己事は正報。或示他事は依報なり。

**校量一念信解之功德**

との一句は分別功德品の意をのべたるなり。  
此品に現在の四信と。滅後の五品と申す。二つの法門がある。

○現在四信  
略解言趣  
廣爲他說  
深信觀成

○滅後五品  
初隨喜  
讀誦經典  
兼行六度  
正行六度

五	四	三	二	一
禪	精	忍	持	布
定	進	辱	戒	施

五波羅密トハ

この四信と五品とは。皆法華經の行人なるが。中に於て一念信解と初隨喜と。此二つが末法今日の吾等に必要の法門なり。故に四信五品の九つの中。第一の一念信解の一つを擧て他を略したり。併し初隨喜の功德は。次の隨喜品に譲る故。此には擧げざるなり。一念信解の功德を校量するとは。上の壽量品の法門を聞て。一念も信解したる功德は多大にして。直に述べがたきが故。別に最も大いなる功德を擧て。其と比較して。一念信解の功德の廣大無邊なる事を示し給ふ。謂ゆる八十萬億那由他劫に於て。五波羅密を行する功德は最大なりと雖。一念信解の功德を百千萬億分して。其一にも及ばずと校量せられたり。さて此一念信解の行人の資格に就て議論あり。夫を解決したる聖判を四信五品抄と云ふ。他宗の人師等は之を位高き人に見るが。天台は五品の中の初品といは

れ。日蓮聖人は初隨喜品は一念三千觀法に入てゐるから。左様なものは末法には皆無なるが故に。五品已下の名字即の人なりとせられたり。而も天台の釋には。或は觀行或は相似と種々にいはれて一定せぬのは。信解の體が異ふからである。本門を一念信解すると。迹門を一念信解すると。功德に相違がある。迹門は機を攝すること薄くして。下位の名字即の凡夫に及ばず。本門は機を攝する事厚くして。下位の凡夫まで其功德を得るなり。迹門では觀行五品の下に出でず。本門は觀行已下の名字即の荒凡夫にも及ぶなり。

天台釋曰教彌實位彌下云

聖判云自爾前圓教法華經攝機自迹門本門盡機也教彌實位彌下六字留心可案之云

此れ聖祖獨歩の妙判なり。方今愚鈍の我等も本門の妙法を一念信解すれば。八十萬億那由陀劫の間五波羅密を行じたる功德に倍する大功德を得る事疑なし。亦復此一念信解の淺行に廣大無邊の功德を得る事は。但に壽量品の教相計を信じたので無く。文底祕沈の妙法蓮華經を信念するに在る事を心得ねばならぬ。

記九云聞於長遠開通無礙信一切法皆佛法又信如來化功長遠是人能知本迹妙理是佛本證若但只信事中遠壽何能令此諸菩薩等増道損生至於極位故信解本地難思境智信心初轉自在無礙方名爲力尙能増進以至一生況信力耶。

この文意は。長遠を聞とは。三身即一の應用を聞きたるなり。聞に隨て。心も身も有情も非情も。色法心法依正萬法悉く通達するを『開通無礙』と釋す。何故通達するかといふに。三千萬法は皆

華嚴經ヨリ已來圓機ノ衆生ハ心佛及衆生是無差別ノ教ヲ開テ心法モ衆生法モ皆佛居タラズトハ信シ居タレドモ其佛ノ應用ガ三世十方ノ故堅ニ應用ニテ方久々遠々ノ應用ニテ横ニ十方無量無邊ノ世

通達無礙ニ迷惑シテアリス也今長遠ノ説ヲ聞テ洞然トシテ來迷惑ノ無明ヲ破ルニ從テ開通無礙トナ

是れ。長遠應用の本佛體を具せる物なりと信解する故なり。而して此釋の意義深うして解し難き故。先づ本迹の妙理を説明して。後。釋の意を示すべし。

(本迹妙理)

文九云寂場本迹復有種種或以涅槃爲本(藏教但空之偏理)從眞起應爲迹(劣應用之事)

或以俗爲本(通教空假之偏理)從俗起應爲迹(帶劣勝應用之事)

或以中爲本(別教但中之偏理)從中起應爲迹(勝應用之事)

復次此三非二亦復非一非三非一爲本(圓教三諦融通之圓理)而三

而一爲迹(三身即一應用之妙事)

此四番の本迹皆本は理迹は事なり。然れども此本の理は但理に非ず。事を具する理なるが故。事理不二の理なり。此を妙理と名

く。亦迹の事も但事に非ず理徧して事の全分に満つ。故に理事不二の事なり。此を妙事と名く。方に知るべし。本の妙理とは事を具するの理。迹の妙理とは事に徧するの理なるを。

又本迹關係して相顯はする義を示さば。本より迹を垂る(是れ本理に事を具する故)迹を以て本を顯はす(是れ迹事に理徧満する故)

此四番は但釋尊一世の本迹なり。五百塵點劫來の中間世々番々の本迹は無量無數なり。今久遠實成顯るれば。中間今日の無數の應用の事及び無數の本理に具する事は。皆此本佛の妙事より垂れたるなりと信解す。此を『信如來化功長遠』と釋す。是を信するに隨て。即ち無數の事具の理及び事徧の理は。皆悉く此本佛の證得し給へる實の根元本理の一妙法より垂れたるなりと知る。此は是れ理より事を垂る事を將て。理を顯はす道理なるが故なり。此を

増進ノハ圓ノ妙道ヲ  
融一ノ度ニ長深ニシ  
テ一覺ルモ尚ホ底ニ  
一底ヲ極ム故ニ増進  
テ底ヲ極ム故ニ増進  
損生トハ變易生死ヲ  
損減スルハ無明煩  
腦重々ナルハ四十二  
度破テ妙覺ニ入ル一  
而シテ拾アル妙覺ト  
ミタシテ拾アル妙覺ト  
下位ヲ進ム死トイ  
フ上ニ進ム生トイ  
ハ淨土ノ變易スル生  
死トイ

『是人能知本迹妙理是佛本證』と釋す。略して語らば久遠實成を聽聞して。如來の化功長遠なる事を信じ。此を信するに隨て。數番の本迹の妙理は。是の佛の久遠に於て證得し給ひる。眞實根元の本理より垂迹せるものなりと知る。此を信解の力と云なり。信解に此力あるが故に。久遠實成を聽聞せる無量無邊塵數の諸菩薩増道損生して。等覺位妙覺位に昇進するなり。若し信解に力無くして。但釋尊の壽命長遠なる事のみを信じたならば。一生入妙覺の極位に至る事は出來ざるなり。故に塵點の菩薩達が。一生入妙覺の極位に昇進せられたるは。本地難思の境智を信解したる力に因るものなり。『本地難思境智』とは境は理心即心法なり。智は事智即覺智なり。この境と智が冥合して不離不混境に非ず智に非ず。而も境而も智。實に不可思議なるを『難思』と云ふ。難思は即妙の



義を釋せる言葉なり。此不可思議が衆生濟度の應用佛の實體なり。扱この不可思議體は無始久遠より常住なるが故「本地」と釋す。

「信心初轉」とは爾前の諸大乘に於て。三諦圓融の妙理を聞けども。二乘を隔つる故。法界圓融の妙理を知る事能はざるのみならず。猶此三諦圓融の理は。始成なれば本無今有にして夢の如し。是より進んで迹門に二乗作佛を聞て。法界一も漏れず。一切圓融せる妙理有る事を信ずと雖。猶此妙理も始成なれば。本無今有にして夢の如し。釋尊入滅し給はゞ共に失せて殘る所は冥合せざる但理存するのみと思ふ。故に爾前の圓教の行人。迹門に進んで聊か信ずる所を轉ずと雖。常住不滅の妙理ある事を信ぜざるは同一にして少しも轉ぜず。此迷心に妨げられて自在無礙なる事を得ず。然るに久遠實成の事中の遠壽を聞き。之を信ずるに隨て。本地難

善薩ノ位階ニ四十一  
ノ高下アリ今下位ヨ  
リ數フレバ  
住名ノ位十段  
行名ノ位十段  
廻名ノ位十段  
地名ノ位十段  
其最上ノ位ニ覺位アリ此  
當得阿耨多羅三藐三  
生一トクニハ略

思の境智の有る事を信解するが故。爾前迹門の時の迷心初て轉じて。法界圓融自在無礙の覺りに入るを「信心初轉自在無礙」と釋す。此は是れ信解に力あるが故なり之を「方名爲力」と釋す。

「尙能増進等」とは信解に力有て。本地難思境智を信解するが故。事中の遠壽を聽聞せる人人の中に。最上位の一生位に至る人數多あり。況や信解に力あれば爾前迹門の迷信初て轉じて正信に入り。自在無礙の住名位に昇るは無論の事なり。方に知るべし分別功德品に増道損生の益を受たる人を擧ぐるに。實に無量無邊にして。世界微塵の數を以て示されたり。此數多の人が益を得たるは。何れも皆信解に力ありしが故なり。若し只但事中の遠壽のみを信じて。本地難思の境智を信ずる力なきときは。増道損生するもの一人も有る可らずといふなり。

問ふ何故に事中の遠壽を聞て。本地難思の境智を信解するを得るや。答ふまづ用に依て體を知る事を示さば。聖祖云「譬バ人ノ聲ヲ聞テ體ヲ知り。跡ヲ見テ大小ヲ知ル。蓮ヲ見テ池ノ大小ヲ計リ。雨ヲ見テ龍ノ分齊ヲ考フ。此ハ皆一ニ一切ノ有ル理リナリ」此中の聲。跡。蓮。雨。の四は用に譬へ。體。池。龍。大小。の四は體に譬ふるなり。是の如く現見の用を以て。未現見の體を識得するは。本來體用は常に離れず互に具し互に融せる故なり。此義を「一切有理也」と判じ給ふ。今正しく答へば。久遠事壽が顯るれば。中間今日の本の理體も迹の事用も俱に迹用なる事顯る。此義顯るゝ時は聞く所の遠壽の事用は。但の事但の用のみに非ず。中間今日の。本理。本體皆此中に攝收せるを知る。然れば此遠壽の事用は事理不二の妙事。體用不二の妙用なるを知り得るなり。

(此れ俱用の三身なり)此妙事妙用を以て其本地の體を推すに。體も亦。但の理。但の體のみに非ず。理事不二の妙理。體用不二の妙體なる事を知る。(此れ俱體の三身なり)此故を以て事中の遠壽を信聽して。本地難思境智を信解する事を得。用を以て體を知る。譬に照して案ずべし誠に難信を信ずる故。信心一轉するなり。妙樂記一云「一本事高難量(事成報身ノ智)二本理深難思(報智所冥ノ境)三本迹化難測(應身化他ノ用)」これ迹門の事理は易信。本門の事理は難信なる事を釋す。聖判云「本門與迹門重々難易問云知此義有何詮答云照生死長夜大燈。切元品無明利劍不過此法門歟。(難易抄)」これ難信難解の本門を信ずるに由て。成佛するの證なり。又本經に「天人及阿脩羅」と彌勒等を破折せられしは。爾前の圓理を修

行せる者。迹門の圓理を修行せる者も。皆迹に執して信心轉せざるが故なり。然るに遠壽を聞て茲に初めて心機一轉したるが故に。爾前迹門の無量の大衆。皆一時に成佛せり。若し信心一轉せぬ内は「六道ヲ出デズ何ゾ九界ヲ出ンヤ」と聖祖は嚴誡せられたり。是が本宗の眼目化導の要點であるから。十分に留意誠慎して研究すべきものとす。

玄義七云又若未發迹顯本者但解迹中事理之麁妙終不能解本中之事粗況解本中理妙彌勒尙不達況餘人。

これ迹門にも麁妙の二つあり。本門にも麁妙の二つあり。迹の二は共に粗。本の二は共に妙。迹は粗法。本は妙法にして。粗とは細蜜に非ず自由に運轉せぬなり。妙は自在に運轉するなり。互具互融と一口に申せども。其組織がいかにも自在に運轉する故。

之を妙とし。少しにても不自由なる處あるを粗といふなり。例せば劍客が競技せん時。其心は自由に用らけども體が勿々さかぬ。是れ心と體とは必ずしも一如し難きものであるが。其比較的自由に用らく心は妙といふべく。思ふ様にきかぬ體は粗といふべきものなり。本門の事の尊きことは。迹門(九界)の心は自由に用らける様なるが。其已上に本の事相は用らけるぞとの義なり。かくの如く本迹の一念信解に碩異あることを知て。本門の上に一大信解の出來難きを信する。其信念を校量して比較研究したのが當品の主眼なり。

### 述歎展轉隨喜之勝利

これは隨喜功德品の意を述べたるなり。

さて前の分別品には五品の種類が擧がつてゐる。初一品を除て餘の四品の功德を校量されし故。五品中初品は校量漏れとなつてゐる故。此を當品で校量せられたり。

問ふ何故に初品の功德は分別品に於て校量せずして。殊更隨喜品の一品を設て別に校量するや。

答ふ夫れ本門は誰人の爲に演説し給ふやと言ふに。末法惡世の名字即の愚凡を濟度するを正意とす。故に『五五百歲廣宣流布』と時を指定す。依て五品の中初品の名字即の功德の大なる事を校量するが。校量中の正意の校量なり故に品を改めて委細に校量せられたるなり。

文句云上來稱美持經功德時衆咸謂入眞因位致斯德於初心之初起輕弱想急聞好堅處地芽已百圍頻伽在殼聲勝衆鳥希有奇特

輕疑釋然文

記云恐人謬解者不測初心功德之大而推功上位蔑此初心故今示彼行淺功深以顯經力文

是は本門の經力最大なるを以て之を信する初心に大功德あり而るに之を知らざる者。一念信解及び初隨喜の功德を疑て。後心深位なるが故功德大なりと謂ふ。此謬解者を教誡せんが爲に。別して初心の功德を校量して稱歎したまふ義を釋す。

文句云初但有、一念、理解、但有、一念、慶、已、慶、化、未、有、事、行、恩、不、及、人、所、獲、功、德、如、來、巧、喻、功、蓋、無、學、況、復、最、初、於、會、聞、者、況、復、二、三、四、五、品、者、況、復、入、位、十、信、十、行、乃、至、後、心、者、誰、聞、如、是、深、妙、功、德、而、不、景、慕、如、來、說、此、令、物、尙、之、文

これ第五十人目の人の功德の廣大なることを擧げて。後々の彌

廣大なることを慕はしめたるなり。「初一念理解」とは自分の念中に解心慶心あつて。口に演ざれば其功德他人には及ばず。乃ち五十人目の者なり。四十九人までは自他に及ぶ。この自分丈の人の功多きを。好堅樹頻迦鳥の譬に寄せて示し。他の者を況顯して彌々深勝ならしむ。このことは聖判四信五品抄に詳解せり。宜しく参照すべし。

聖祖云至隨喜品上初隨喜重明之五十人展轉劣也至第五十人有二釋一謂第五十人初隨喜内也。二謂第五十人初隨喜外也。外者名字即也。教彌實位彌下(弘決六)釋此意也。自四味三教圓教攝下機自爾前圓教法華經攝下機自迹門本門下機盡也。教彌實位彌下六字留意可案之文

文句は天台の釋故。一念信が初品に局るとすれども。聖祖は初

品已下にも及ぶと定められたり。天台が觀行五品の初隨喜品に止まるといはれたのは。迹門を聞いての一念信なる故にして。聖祖の觀行の初品已下に及ぶといふは。本門を聞いての信解なるが故なり。兩釋ともに齟齬するにあらずと知るべし。

### 明六根互融之勝德

これは法師功德品の意をのべたるなり。六根とは。眼・耳・鼻・舌・身・意の六であるが。此六根が互融するとは。六根中の何れの一根でも。皆各々他の五根の用らきをなす事である。

大經云如來一眼則能見色聞聲嗅香別味覺觸知法。是に例して他の諸根が皆各根の用らきあることを知るべし。六

根の清淨とは。六根皆透明玲瑯にして。萬象が現するのである。即ち佛陀の六根は皆透明である。此に内外清淨とて。意根を内とし。五根を外とす。亦身内には色像等の現するを内とし。身外に色像等の現するを外とす。六根莊嚴とは。今眼の一根に付て示す。餘は例して知るべし。互に五眼を具るを莊嚴といふ。五眼とは十界の眼なり。類似を合する故十を縮めて五とす。五道を肉眼と名け。天道を天眼と名け。二乗を惠眼と名け。菩薩を法眼と名け。佛界を佛眼と名く。此五眼が相互に具するを眼根の莊嚴と云なり。餘の五根の莊嚴も皆之に同じ。

而して六根清淨は大品般若に明され。六根莊嚴は正法華に。六根互融は上記の大經に明されてあるが。此三經は六根に就ての三功德の一徳宛を各説明したるが。此三功德を總統して説き盡した

るは。今の法師功德品である。尤も經文の上には互融の文字はなけれども。其義は十分にある。

法師品云當得八百眼功德千二百耳功德八百鼻功德千二百舌功德八百身功德千二百意功德以是功德莊嚴六根皆令清淨

故に玄義六云若能持是經功德則無量如虛空無邊其福不可限互具之意彰文と釋す。この功德はいかなる人が得るぞといふに。五種の人なりと經文に見ゆ。又々五種具足せざれども。只一種の行人にも同じくこの功德を得べし。記十云五種法師各得六根又云五種法師悉具六根清淨

此文に各といひ悉といふから。五種の中の一種の行人が皆得通である。五種を具足して一人が行せずとも。各種の功德を皆得するとの意味なり。謹んで經文を拜見するに。『雖未得天眼肉眼眼力

如是』と説き給ふ。天眼を得て通力を現はすは當然であるが。凡夫の肉眼中に此得通する。是れが誠に不思議なる所。難有事ありたきことで。吾等凡夫の六根は其本源に於て。互具互融の徳を具してゐる。然るに悪業の爲に此徳を蓋はれて不自由の六根となつてゐるが。今大力の經を修するに由て。少分本體に具したる徳を彰はす。此故に事實上少分の六根互融を見ることが出来る。返すくも行淺功深以顯經力の釋を案じて増信すべし。

**引不輕大士之往事舉而強毒之。之逆縁顯逆卽是順之圓意。**

これは不輕品の意をあげたるなり。

『不輕大士之往事』とは過去世に。大成國の威音王佛と申すが。八

相成道して一切經を説き。衆生を濟度し畢て。其滅後正法過ぎて。像法の中に一人の法華經の行者あり。不惜身命に他宗權門の四衆を折伏して。『我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩道當得作佛』の二十四字を信唱しければ。四衆大に瞋り杖木瓦石を以て打擲し。全身血に塗れしが退かず。猶強て『我深敬汝等』の二十四字を弘通しければ。時の人不輕菩薩と字しける。此菩薩は弘通の功力に由て。相似六根清淨。内凡の位に昇り。臨終の後數多の燈明佛等に値上りて成佛得脱した。乃ち今の釋尊これなりといふ。又誹謗の四衆は謗罪を後悔せしかど尙惡道を免れず。然るに終には今日の法華會座に値遇して得道することが出來た。之を往事といふ。

『而強毒之』とは強折伏の事で。毒とは煩惱の爲には。法鼓を折

つが毒となる故なり。畢竟四衆が悪口し反抗するのが逆縁となつた。これ恰も日蓮聖人の如く。當時の四衆三類は放任して置くも墮獄免れ難いのであるから。同じくなら直接強く反抗させて之を逆縁とせよ。逆縁は人の大地に倒れて又大地に頼て起さるが如く。遂に成佛の因を生ずといふ』是迄は不輕品の教相である『逆即是順』とは是れ教意を示したのである。

記云唯圓教意逆即是順自餘三教逆順定故文

文句九云行於非道通達佛道云

記九云能達九界非道純佛法界妙道之用文

逆は非道なるが。これも實相の外にはあらず。逆意は心の煩ひなり。窮子が長者の子に非ずと思ふが如し。逆意の體は即ち佛道に歸する順意なり。

報文  
文句十云傍者得善惡兩果謗故墮惡聞佛性名毒鼓之力獲善果

此善惡の二果は強毒の逆縁に因て之を感ず。當に知るべし。感果は善惡の二なれども。因縁は但一の逆縁なる事を。然れば。墮惡善報。の二原は俱に逆縁の時同時にこれあり。故に逆即是順といふ。不輕菩薩の法華強毒の化道は。執權迷者の凡情に逆すと雖其毀者の本具の佛性には順なる故。逆縁に即して順縁となるなり。今の逆即是順とは是意なり。聖祖は法門は釋尊に受けられたれども。弘通の方法は専ら不輕菩薩の跡を紹繼せられたり。聖判云日蓮是法華經行者也。紹繼不輕跡故輕毀之人頭破七分。信者福積安明云。又云此人得守護之力以本門本尊妙法蓮華經五字令廣宣流布



於閻浮提歟。例如威音王佛像法之時不輕菩薩。以我深敬等二十四字廣宣流布。於彼土招一國杖木等大難也。彼二十四字與此五字。其語雖殊其意同之。彼像法末與是末法初全同。疑云以何知之。彼不輕菩薩初隨喜人日蓮名字凡夫也。

これ不輕菩薩の禮拜と聖祖の唱題と。形式は異れども其義は同じとは。畢竟一切衆生の内心に潜める佛性を動かす點に於て契合するをいふ。

**現十種難思之神力付末法弘通之要法**

此二句は神力品の意をのべたり。  
十種とは

聖判云此十神力以妙法蓮華經五字授與上行安立行淨行無邊行等四大菩薩前五神力爲在世後五神力爲滅後也雖然再往論之一向爲滅後也故次下文云以佛滅度後能持是經故諸佛皆歡喜現無量神力等云

- 一 吐舌至梵天——令衆信本迹
- 二 通身放光——表理
- 三 警欬音聲——表教
- 四 彈指音聲——表人
- 五 地六種動——表行
- 六 普見大會——長未來機
- 七 空中唱聲——表教
- 八 歸命爲弟子——表人
- 九 遙散諸物——表行
- 十 十方如一佛土——表理

明現在流通本迹

惣表未來不已

この十神力が超勝せることをいはず。釋尊一代説教中無數の神力があるが。他經は且らく措き本經に於ても序品の六瑞を始として。

幾多の神力を現じ給ひしかど。この十神力程勝れたるものはない。其證據は。放光も何處まで至れるやといふに。この時の虚空會は三千三百萬億の國土を通りぬけて十方土に至るといふ。其他の各神力皆盡十方世界に通徹せぬものはない。これ實に一切經中空前絶後である。是を以て推量せよ此瑞相は何事を表するぞといふに。本化の弟子に付囑して。本門を末法に弘通し。萬年に流布せしむる其教益の甚大なることを表彰したるなり。爾前經の瑞よりは法華經迹門の瑞が廣大にして。迹門よりは本門のが甚大なるに徴するも。皆これ法の彌々益々超勝せることを證明するものなり。されば

聖判云、夫顯密二道一切大小乘經中釋迦諸佛並座舌相至梵天文無之。

といはれ此妙法は末法凡夫を利益する耳ならず。十方淨土の菩薩衆をも化益する大法なるが故に。十方に通徹せる瑞相なり。上は本佛を除て。已外の諸佛と雖。皆之を奉行する法門なり。若し之を受けずんば佛になれぬ。

十神力を難思といふは如何なる意味ぞや。

謂く十神力は瑞相なり。瑞は事を表す。天台云小尙有微大焉無瑞以近表遠。瑞は事の大小に應じて現はる。故に瑞の大小を知る。可思議の法起らんとする時の瑞は。亦可思議にして解し易し。不可思議の大法起らんとする時の瑞は。不可思議にして容易に解し難し。今の十神力は抑も何事を表するや。

聖祖云抑何レノ經ニ六種動ユレナキ。一切經ヲ佛トカセ給ヒシニ皆是アリ。然レドモ佛法華經ヲトカセ給ハントテ。六種動アリ

シハ。衆モユトニオドロキ。彌勒菩薩モ疑ヒ。文殊師利菩薩ユタヘシハ。諸經ヨリモ瑞モ大ニ久シカリシカハ疑大ニ。決シカタカリシ故ニ。妙樂云何大乘經不集衆。放光。雨花。動地但無生於大疑等。此意ハイカナル經々ニモ序ハ候ヘドモ。コレホドナルハナシトナリ。サレバ天台大師云世人以蜘蛛掛則喜事來乾鵲鳴則行人至小尙有徵大焉無瑞以近表遠。夫一代四十餘年ガ間ナカリシ大瑞ヲ現シテ。法華經ノ迹門ヲ説セ給フ。又其上ニ本門ト申ハ。又爾前ノ經々ノ瑞ニ迹門ヲ對スルヨリモ大ナル大瑞ナリ。大寶塔地ヨリオドリ出デ。地涌千界大地ヨリナラビ出デ。大震動ハ大風ノ大海ヲフケバ大鼓ノゴトクナル。大波ノアシノ葉ノゴトクナル。小船ノホニツクガゴトクナリシナリ。サレバ序品ノ瑞ヲ彌勒文殊ニ問フ。涌出品ノ大瑞ヲバ慈氏ハ佛ニ問ヒタテマツル。

是ヲバ妙樂釋云迹事淺近可寄文殊。本地難裁故詫佛ト云リ。迹門ノ事ハ佛是ヲ説給ハザリシガドモ。文殊等是ヲシレリ。本門ノ事ハ妙徳スユシモハカラズ。此大瑞ハ在世ノ事ニテ候。佛神力品ニ至テ十神力ヲ現ズ。此ハ又サキノニ瑞ニハ似ルベクモナキ神力ナリ。序品ノ放光ハ東方萬八千土。神力品ノ大放光ハ十方世界。序品ノ地動ハ但三千界。神力品ノ大地動ハ諸佛世界ノ地皆六種震動ス。餘ノ瑞モ亦復カクノゴトシ。此神力品ノ大瑞ハ。佛滅後正像二千年過テ末法ニ入テ。法華經ノ肝要ノヒロマラセ給ヘキ大瑞ナリ。經文云以佛滅度後能持是經故。諸佛皆歡喜。現無量神力。又云惡世末法時等。以上祖判

是に由て之を觀れば。序品の彌勒等の爲には難思。文殊等の爲には不難思。涌出品の瑞は彌勒文殊俱に難思なり。何を以て是を

知る。答ふ聖祖既に『本地難思境智妙法ハ迹佛等ノ思慮ニ及バズ何ニ況ヤ菩薩凡夫ヲヤ』と判じ給ふ。夫れ所表の事既に迹佛難思の妙法なり。能表の瑞相(十神力)亦迹佛の難思なるは當然なり。瑞の大小に依て起る事の大小を知る。翻て法の難易を以て瑞の難易を推せば。迹佛難思の大瑞なること明白なり。今の諷誦章に『難思』といふは恐らく是義なるべし。

『末法弘通之要法』とは日達上人云。此一句文至肝要也。今誦文中述當家本門本尊所依經意正在于此。故次文以此要法爲本尊之本體也。是故上行等本化大士。傳受此要法弘宣於末法爲一切衆生所尊境。即本門本尊也。授與此要法於一切衆生之場所是本門戒壇也。受持此要法至信口唱此名是本門事行也。此三大祕法末法相應。宗旨綱要故。弘通儀甚以爲難。一簡其教二鑑其機三待其時四

知其國五考教法流布前後軌則此教相五個扶立今宗旨二法當知吾祖建立之基礎只今品付屬要法焉。

聖判云何執神力一文耶答此文有深意乃至久遠實成釋迦如來乃至爲說後五百歲中廣宣流布付囑召出地涌菩薩本門當體蓮華以要付屬文也釋尊出世本懷末法我等成就現當二世當體蓮華誠證此文也。

達師の釋と聖判とを合せて靜思せば。本門壽量品の大法を今の神力品に於て結要して。上行菩薩に取次がしめて。末法萬年の衆生に授與し給ふ事明白なり。若し本化の菩薩に於ては。無量廣博の大法に於ても之を宣傳し給ふは自在なる事。風の空中に於て一切障礙なきが如くなり。今要法に結んで本化に付囑し給ふ事は。佛意必ず末法下根下機の者に授與し給ふに在るなり。

### 是則本門流通之大法也

名用體一切 宗一切 一切  
 所有之法自在神力 祕要藏 甚深之事  
 妙法應身 法身 報身

一切自在神力 (迹佛本佛の形益聲益をいふ)

一切祕要之藏 (九界各各の實相迹佛所顯の實相本佛所顯の實相なるが故一切といふ)

一切甚深之事 (迹因迹果本因本果なり故一切といふ)

一切所有之法 (一切經に示す所の八萬法藏の名字)

要とは聖判に『九界十界ニ亘リテ一切ノ所具ノ佛界ヲ呼ビ顯ス』  
 といはれ。譬へば日本全國各地の倉庫に散在する金を一の根本たる大藏省に一とまとめにして應用さするが如し。之を本經に三つに結び法報應といひ。更に再び結んで一切所有之法としたるなり。

所謂要が中の要と申すは此故なり。

『是則』の文意に就て疑あり。其故は『止過八恆沙之弘經』より已下一切をまとめて『是則』と受たること明なるが。それでは正宗の涌出壽量も皆流通なりといふことに聞えて穩かならぬ様なり。

一義云前の『是則迹門流通之説相也』の文に對句として見るべきかと

一義云本門序正は始めより末法の爲に説く。聖判にも『以本門論之一向以末法初爲正機乃至本門序正流通共以末法初爲詮』とあるから。且らく流通に囑するか。といふはこれ本門は末代衆生の爲なり。在世は傍である故に本門は末法に流通せしむる大法なりといふ。在世の一會の衆はありしかども。遠く下方の本化を呼び出して末法に流通せしむる義に任せて。本文の如く仰せられ

たるかといふにあり。

一義云、今本章に諸品の大意を述ぶるの意は。正しく結要付囑は是れ本門本尊の依據なることを顯はすにあり。故に正意に任せて結て本門流通といふか。との義なるが。これは畢竟、神力品に明された結要法をいひあらはすが正意なる故に。『是則本門流通之大法也』と仰せられたるかといふなり。已上三義の内第三の義を善しとす。流通に自ら二義あり。一は能通の經典。二は所通の法なり。上にいふ『迹門流通之說相』とは能通の經典なり。今『本門流通之大法』とは所通の法體なり。能所兩門を互に擧て其義を悉すものかと思はる。然れば此一句は涌出品より神力品に至る七品の經典に依て。付囑せられたる要法を擧て。『是則本門流通之大法也』と結ばれたるものなり。

『大法』とは神力品の本化の發誓に『眞淨大法』とあり。これを別誓ともいふ。この別誓に由て別付囑がありしなり。別誓に就て大法といひ。別付囑に付て要法といふ。眞淨とは眞は常德、淨は淨徳なり。樂。我の二徳は略せり。則ち常樂我淨の大法と云ふ義なり。大法と要法とは法體全く同じ。但開結の異なるのみ。神力品に十神力を現し已て云『若我爲是神力無量無邊百千萬億阿僧祇劫爲囑累故說此經功德猶不能盡』是の如く妙法蓮華經に含蓄せる功德を開發せば無量廣大なり。故に大法といふ。又次の經文に云『以要言之如來一切所有之法。乃至皆於此經宣示顯說』と。これ則ち釋尊が末法衆生の爲に。彼の廣大無邊の四徳波羅密の大法を結んで。此四句に攝め。以て本化菩薩に付囑せられたるものなり。之を要法といふ。但し此四句は即題目なり。此義は次に至

て示す。又この結要は釋尊の自作に非ず。釋尊が演説して教導し給ふ故『佛大慈悲ヲ起シテ妙法五字ニ此珠(四德波羅密ノ三千ノ萬法)ヲ裏ム』と妙判し給ふ。妙法を如意珠に譬ふ。如意珠には一切の萬寶を攝收せり。此れ何人の作爲にも非ず。天然の徳なり。是を以て知るべし。妙法に廣大無邊の徳を攝めたるは天然の徳なることを。聖判云『日本ト申名ノ内六十六箇國アリ。出羽ノ羽モ。奥州ノ金モ。乃至國ノ珍寶人畜乃至寺塔神社モ皆日本ト申二字ノ名ノ内ニ攝レリ』と。この攝收も自然なり。是を以て結要の題目ニ譬ひ給ふなり。

### 其要法者所謂顯目五字是也

これは前を承け後を起すの文なり。此句の必要は。前は釋尊か

ら上行に付囑せられたる要法のことをいはれたもので。後は勸請したる本尊のことをのべたるなり。

#### 結要四句

#### 四重立義

- 第一句 如來一切所有之法…名—妙名—妙名—人身
- 第二句 如來一切自在神力…用—應身—業道—燭
- 第三句 如來一切祕要之藏…體—法身—苦道—識
- 第四句 如來一切甚深之事…宗—報身—煩惱道—命

この四句ともに如來といふは。名體宗用皆果分なるが故なり。又四句ともに一切といふは。三世十方に周徧せる名體宗用を漏さざる故なり。『所有之法』とは久成如來十方方法界の一切萬法を證得す。此證得に約して一切萬法を如來の所有と名く。其所有之法一として無名なるものなし。必ず名字あり。故に佛音聲を以て證得

の法を演説して未證者を教訓す。則ち八萬四千法藏の名目これなり。此名字無量なれども互具互融して。一名一切名。一切名一名なり。此妙名を法華經に宣示顯説す。今結んで『如來一切所有之法』といふ。故に第一の句を以て名立義を證す。

『祕要之藏』とは久成如來證得の法の正體なり。如來獨り得て他は知らず。亦器に非れば授けず。故に祕といふ。此正體を天台の釋に『實相體即權而實離斷無謗也。即實而權離建立謗也。權實即非權實離異謗也。雙照權實遍一切處離盡謗也』といふ。故に正體を要といふ。包含する所多けれども積聚せざるを藏といふ。此正體一にして三。三にして一。實に四謗を離れたる妙體なるを。法華經に宣示顯説す。今結んで『祕要之藏』といふ。故に第三の句を以て體立義を證す。

宗トハ經ノ宗也聖人  
教ヲ垂ルコト意修  
行ニ在リ法華經ニハ  
久成如來ノ實證ニハ  
ノ因果ヲ説キ極ム聽  
者ハ但實證ノ佛果ヲ  
求メテ實修ノ佛因ヲ  
修スレバ法華經ノ肝  
要ナリ因果ヲ以テ宗

八自在トハ  
能示ニ一身多身

『甚深之事』とは久成如來所得の法は。修因得果の法なり。實相を甚深と名け。實相のために因を修するを深因と名け。實相を究竟するを深果と名く。實相は因果不二の妙體なれば。因に非ず果に非ずして。而も無量衆善の佛因。無量證得の佛果を包含す。實相の爲に修する善因とはこれ實相の外に別在するにはあらず。則ち實相の體内に包含する衆善の事相に顯はれたるものなり。深果も亦是に準じて知るべし。故に因果を事といふ。此無量の因無量の果互に皆融通して一因に一切の因果を具し。一果に一切の因果を備へ。一にして一切。一切にして一なる。妙因妙果を法華經に宣示顯説す。今結んで『甚深之事』といふ。故に第四の句を以て宗立義を證す。

『自在神刀』とは。久成如來所得の法は力用あり。内用を自在と



- 二 數如微塵。以三千大千世界。
- 三 以一身輕舉遠到。
- 四 現無量類。常居一國。
- 五 諸根互用。
- 六 得一切法如無得想。
- 七 說偈義經。無量劫。
- 八 身遍諸處。猶如虛空。

名け。外用を神力と名く。果上には一切萬法通達無碍にして八自在を具し。物の機に稱ふて無量の神力を示現す。此神力互具互融して。一力一切力。一切力一力なる妙用を。法華經に宣示顯説す。之を結んで『自在神力』といふ。故に第二の句を以て用支義を證す。

この四句の中に第一の句は惣なり。第二三四の句は別なり。別とは惣は三を含藏す。故に今惣中の三を開説して。結要の四句とす。由て二三四を合すれば第一の一句なり。一句を開けば二三四となる。故に妙樂釋して云く『釋名是惣。體宗用是別。別別於惣。惣惣於別』と又支義に開合を釋して云く『釋名惣論三軌。體宗用開對三軌。釋名惣論三道。體宗用開對三道。釋名惣論三身。體宗用開對三身。釋名惣論三德。體宗用開對三德。譬如惣名人身。』

開身則有識命。燭人身譬名識譬體命譬宗。燭譬用。(略抄)之を以て知る。結要四句は但妙名の題目なることを。又『記十云結要四句者本迹二門各有宗用二門之體兩處不異。名冠此三而惣三。一部之要豈過於此。故惣攬之以成流通』この釋の意は。廣の別文は一部なり。惣要は妙名の一法なり。結要に四句を連ぬと雖。惣要必ず四にあらず。妙名は體宗用の三を具す。故に妙名は一にして三。三にして一なり。故に今妙名を開いて第二第三第四の三句を連ぬ。故に妙名は三句に冠して三句を惣括す。これ則ち一部の總要なり。此義を以て結要に四を連ねて。以て末法流通の要法を成立するなり。此義を以て今の諷誦に結要四句を受て。其要法者但一個の題目なることを示す。

然此妙法蓮華經者。三諦圓融之法體。性海果

分之内證。萬行衆善之都名。本地甚深之奧藏也。是此本尊之本體也。

この數句は中尊の題目を講述せられたり。

『然』はシカレバと訓じたし。さて此妙法蓮華經は神力別付の要法なる事を。次上に書顯してあるので。其を受けて『然』といふ。其價值甚だ貴重なりと仰せられて。説明にかかりしものなり。

『三諦圓融之法體』三諦とは三種の理なり。空假中の三諦なり。其名目は瓔珞仁王經よりいづ。曰く『有諦(假)無諦(空)中道第一義諦(中)』其名は衆經にあり。本經壽量品に云く『非如非異』と。これ中道第一義諦なり。如とは不異なり。空無の義なり。されば非如(空)非異(有)とは則ち中道の義なり。

聖判云衆生ニアル時ハ。之ヲ三諦トイヒ。佛果ノ上ニハ此ヲ三身トイフ。一物ノ異名ナリ(惣勘文抄)

三諦は只これ三道なり。空諦は煩惱道。假諦は業道。中諦は苦道なり。此三圓融するは。三道即三徳なるが故に。止觀に『生死即法身。煩惱即般若。結業即解脫』と釋す。今三徳の圓融を示さば。

○法身ニハ究竟ノ徳アリ(法身ハ法界ニ徧滿シテ到ラザル處ナキガ故究竟ト云フ)

○般若ニハ清淨ノ徳アリ(覺智ハ明鏡ノ如ニシテ法界ノ萬物ヲ影現スガ故清淨トイフ)

○解脫ニハ自在ノ徳アリ(果上ニハ一身變ジテ萬物ノ形ヲ現ズル事意ノ如クナルガ故自在トイフ)

三名あれども三體無し。これ一體と雖三名を立つ。これ三徳即實相の一なり。故に法身究竟すれば。般若解脫も亦究竟す。般若

清淨なれば。餘も亦清淨なり。解脱自在なれば。餘も亦自在なりといふ。三徳圓融する事。既に是の如し。三道は何故に然らざる。此三道には三障あるが故なり。

生死の苦身は報障として。過去謗法の罪が報ふて法身を拘執し。究竟の徳を障るが故。煩惱の迷心は煩惱障として。法華經不信の無明心が。般若を覆ふて清淨の徳を障るが故。業の不如意は業障として。生生世世法華の教に反對する要業が。解脱を束縛して自在の徳を障るが故なり。

是の如く三障は三徳を障碍して。圓融の用らきを妨ぐと雖。三道の體をば破る事能はず。密雲天日を覆ふて光を隠すと雖。日の體を破らざるが如し。此義を以て三道即三徳と釋す。三徳の體即三道なるが故。三道を觀境として觀智を之に及ぼす。此時三道は

三別ならず。何れの一道を觀るも即空即假即中なり。一二三無けれども。而も一二三なり。一二三を遮し。一二三を照す。遮も無く照も無く。皆究竟なり。皆清淨なり。皆自在なりと達觀す。此を三諦圓融の觀といふ。今の文に『三諦圓融之法體』と云は。則ち觀智を以て達觀せらるる觀境の三道を指て法體といふなり。

此法體を三道と名くるは隨他意方便の附名なり法體天然として實名あり。其實名は此法體に冠し而も法體を惣す。其實名とは何ぞや。謂く結要付囑の五重立。名。體。宗。用。教の妙法蓮華經是也

釋尊五十年の説教は。空假中の三諦の説明耳なり。此外に法なし。何に由てか之に迷はん。而るに法華以前四十二年の經説は。三諦を分別して八と爲し。一分宛各各に説き並べて之を結合せず。或は空諦と稱揚する時は。有物を嫌ふて迷法と示し。或は沈空の者を呵し

て佛性を斷すと云ふ。或は但中を稱歎して有無二諦を嫌ひ。其說區々なれば佛教の中に於て諍ひを生ず。右を捨て左を取り。左を取る者は右を捨つ又中を取る者は左右俱に捨つ。今法華經に至て彼の諍論を止む『於一佛乘分別說三』とて但一の圓融三諦の佛乘を分割して。或は二或は三と。假りに方便を以て未熟の衆生を教示せしと也。此旨を『聖祖示シテ云大綱ノ三教ヲ能能可學頓ト漸ト圓ト三教ナリ是一代聖教ノ惣ノ三諦ナリ頓ト漸トノ二ハ四十二年ノ説ナリ圓教ノ一ハ八箇年ノ説也合シテ五十年ナリ此外ニ無<sub>レ</sub>法由<sub>レ</sub>何迷<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>衆生時此云三諦成佛果時此云三身一物ノ異名也說顯之云一代聖教開會之成<sub>レ</sub>只一惣三諦時成佛此云開會』云是の如く三諦隔歷<sub>(四十年)</sub>三諦圓融<sub>(八箇年)</sub>の教は是れ皆經典なり。今謂所の『三諦圓融之法體』とは。妙法は一切經が詮する所の實體實物

なる故。法體と云ふ。三諦圓融の法體は經の心なり。經典は其說明なり。此説明に二つあり。三諦圓融の實說と佛見三諦隔歷權說(二乘菩薩所見)となり。已上は權實相待の說なるが。進んで迹門の佛所見と。本佛の所見とを相對して。同異を示さば。法界萬法は元來圓融のものなれども。之を覺知する智慧なし。然るに佛獨り之を覺知す。初めて能覺の智と不覺の三諦と冥合して。茲に法界は三諦圓融不思議の用らきを起すと見る。此佛は何時出來たといひば十九出家三十成道の始めある釋尊なり。其已前はいかにといひば。此三諦圓融の體は依然として有りしかども。作用が現はれざりし故。此法界圓融の用らきは本無今有にして。所謂『夢中の權果』なり。由て三諦圓融の徳は常住不滅といふ可らず。聖判云無始無終ノ義缺テ具足セズ。又無始ノ色法。心法。常住

ノ義ナシ。又云本無今有ノ失何ゾ免ルルユトナ得ンヤ。云云  
この故に法界法爾の實相に反し。教と理と合はぬより。經已外  
に實相は用らいて居ることになる。

本佛の所見の三諦圓融はいかんといふに。覺智と三諦とは本來  
法爾として冥合してゐる。法界は天然として恆に三諦圓融不思議  
の事用あり。然れども惑者は迷て之を覺知せず。唯本佛獨り之を  
覺知す。迹佛の覺知は覺智と體と（法界萬法の）別物なるが。本佛  
の覺知は體即覺智である。されば本迹二教の教功の相違いかんと  
いふに。

法界は無始已來智と三諦と冥合せるものなるに。之を説明せし  
迹門の經説は。この本體に相違して圓融せず。本門の經説はこの  
本體に契合して相即す。

聖判云法華ハ文理真正ノ經王ナレバ。文字即實相ナリ。實相即  
妙法ナリ。

とはこれ本門の意を明して説かる。故に但本門壽量の經典のみ。  
法界の實體に契合す。爾前迹門の經典は本體に相違するが故に。契  
合せず。是の如く三諦の説明に。隔歴の權説と。圓融の實説と。亦  
實説中に本無今有の迹説と。本有常住の本説と。各々相違あるこ  
となるが。最後に本門壽量品と七字の題目との相違いかんといふ  
に。

聖判云自行ノ法トハユレ法華經八ケ年ノ説ナリ。ユノ經ハ寤ノ  
本心ヲ説キ給フ。唯衆生ノ思ヒ習ハセル夢中ノ心地ナルガ故ニ。  
夢中ノ言語ヲ借テ寤ノ本心ヲ訓ユルナリ。故ニ語ハ夢中ノ言語ナ  
レドモ。意ハ寤ノ本心ヲ訓ユ。云云

此意は法華經の義は。三諦圓融の實義を教へたれども。教相の言語は。三諦圓融の法體の實名に非ず。故法華經の文字及び讀誦の發聲は。彼の法體に契合する力微弱なり。されば壽量品は迷の人の言語を借て。其實證の大法を説明したものなるが。此壽量品の意たる七字の題目は。文字も言ばも共に正しく。本體有のままの全體なり。今上來説きし所を圖解すれば。

六道衆生所見  
二乘所見  
菩薩所見  
迹佛所見

法界ノ實體ヲ誤認スル故ニ生死ノ苦患ヲ免レズ

本佛所見

壽量品ハ法界ノ實體ニ少分合一シ  
壽量ノ題目ハ法界ノ實體ト全然合一ス

次に法體論いかんといふに。

抑も吾人の信奉する本門本尊の中央なる七字の題目は。壽量品

に説き顯はされた實體にして。經の文にあらず。亦經の義にも非ず。法界の全體がありのままに現顯したるものなれば。實體。本法。妙法。と稱歎す。此題目は本尊の本體にして。無始久遠劫來。三世常住。三諦圓融して活動し。盡十方法界の依報正報。色法心法たる。甚深無量の一切法を結要する。妙法蓮華經なりと知るべし。  
『性海果分之内證』性海とは略なり。法性海又は壽命海なり。法性とは理に名づけ。壽命とは智に名づく。而も壽量品所顯の法體は爾前迹門と異り。本來本有の境智冥合の妙體なり。境智乃ち理智一體なるが故に。天台は『如來壽命海中之要』といはれ。妙樂は『法性海中之要』といへり。これ即ち境智互に舉て其冥合を知らしむるなり。今の諷誦に果分といふ。この二字は境智冥合したることを現はすなり。(不冥合は因分なり)。故に法性海即壽命海な

りと知るべし。海は譬なり。本據は華嚴海空より出でしか。壽命の正體は甚深(三世)無量(十方)の一切萬徳を壽命中に惣合する故。大海の深廣なるにたとへしなり。

内證とは聖判云『我内證ノ壽量品ヲ以テ授與スベカラズ末法ノ初謗法ノ國惡機ナルガ故。之ヲ止メ地涌千界ノ大菩薩ヲ召シ壽量品ノ肝要タル妙法蓮華經ノ五字ヲ以テ閻浮ノ衆生ニ授與セシムルナリ』と何故に題目を内證壽量品といふか。曰く久遠劫來。世々番々に成道を唱へ。能證所證の本理を顯説し給ふ經典は。これ外用の壽量品なり。之に反して内證といふは。本地に於て内に證得し給へる本體は。神力別付の要法の題目なるが故に。今此理を明して。妙法蓮華經を内證の壽量品といふ。什師の意も亦此題目は壽量所顯の法性海にして。教主釋尊の證得し給へる祕法。出世の

本懷(内ノ意)なるが故に。内證といはれしものならん。

『萬行衆善之都名』萬行とは六度萬行なり。無量義經に『雖末得修行六波羅密六波羅密自然在前』といふより出づ。本經に『欲聞具足道』といふ義に同じ。これを聖判に『欲聞具足道トハ。大經云薩トハ具足ノ義ト名ク。天台云薩トハ梵語此妙ト翻ズ。乃至妙トハ具足。六トハ六度萬行ナリ。諸ノ菩薩ノ。六度萬行ヲ具足スルヤウチキカント思フ』これ乃ち南無妙法蓮華經を六度萬行の具足せる道なりといふ。

衆善とは佛教大意に『諸惡莫作衆善奉行』といふ。これに據れるか。而し什師の意は。一切佛教に奉行する處の衆善が。皆悉く集會する妙名なりとの仰せあるべし。其證據は

聖判云法華經ニ二事アリ。一ニハ所開。二ニハ能開ナリ。開示

悟入ノ文。或ハ皆已成佛道ノ文。一部八卷二十八品。六萬九千三百八十四字。一々ノ字ノ下ニ。皆妙ノ文字アルベシ。ユレ能開ノ妙ナリ。此法華經ヲ謂シラズシテ習ヒ談ズルモノハ。但爾前經ノ利益ナリ。阿含經開會ノ文ハ經云我此九部法隨順衆生説入大乘爲本云。華嚴經開會ノ文ハ一切世間天人及阿脩羅皆謂今釋迦牟尼佛ノ文。乃至外典開會ノ文ハ若説俗間經書治世語言資生業等皆順正法。

是の如く具さに舉れば本門の十妙。萬行ノ衆善。皆納まりて漏るるもの一も無し。これ豈に妙法は萬善の都名にあらずやとの仰せなり。

『本地甚深之奧藏也』…本地とは立義一云『本地甚深之奧藏也』と籤一云初叙有經之由。乃至初由本證故能説之。迹中雖説推

功有在。故云本地。これ本據なるべし。而して此文の意は妙法蓮華經は今日垂迹應世の中に説くと雖。これ本地に於て證得するが故に。今日迹中に説くことあり。されば今日の壽量品に於て宣説する妙法は、其功全く本地にあり。この故に妙法の功を推し定めて本地といふぞとなり。

『甚深』とはこの題目は豎に三世に亙りて。法性の淵底を極める故に甚深といふ『奧藏』とは横に十方法界の功德を含藏するが故に奧藏といふ。經に(四ノ卷)是法華經藏深固幽遠なりとあり。奧は幽遠の義なるべし。十方法界一色一香までも。皆悉く萬法を具して佛法ならざるはなし。然れども深固幽遠にして。人の能く至るものなし。藏とは含藏なり。妙法五字の中には。一念三千の寶珠を含藏すといふ義なり。



此釋の證體に付て迹門の指す處と本門の指す處とを此の法門あり其義は此書中に往々説明したれば照し合せて了るべし。又此釋は聖祖門家には無

聖判云妙法蓮華經五字ノ藏事妙法ノ五字ノ中ニハ一ニハ一念三千ノ寶珠アリ。五字ヲ藏ト定ム。乃至法華經第四ニ是法華經藏トイヘリ妙華嚴法阿含蓮方等華般若經涅槃又云妙涅槃法般若蓮方等華阿含經華嚴已上妙法蓮華經五字ニハ一念三千ノ寶珠アリ。三世ノ諸佛ハ此藏ノ内ヨリ。或ハ華嚴ノ寶ヲ取出シ。或ハ阿含方等般若ノ寶ヲ取出シ。種々說法シ給ヘリ云。

『是此本尊之本體也』この文意は人本尊と法本尊の二者を。本末と體用とに約して示せるものなり。

籤一云長壽唯是證體之用也。

と長壽とは人なり。證體とは法なり。用とは又長壽をいふ。これ法を體とし人を用として。本末を立たるものか。聖判云釋迦多寶ノ二佛ト云フモ。妙法ノ五字ヨリ用ノ利益ヲ施

用なりと思ふは非なり。又長壽は用なれば重きを置かず。證體は本迹一致なりと思ふも亦大いに非なり。斯る非義に陥らざるを正信と云ふ能々注意すべし。本抄ハ天台ノ學僧最遠房ニ與ヘタルモ佐渡正宗中ニアリトイヒ時トイヒ實ニ究竟ノ聖判也

シ給フ時。事相ニ二佛ト現レテ。寶塔ノ中ニウナヅキ合給フ。如是等ノ法門ハ。日蓮ヲ除テハ申出ヅ一人モアルベカラズ。乃至釋迦多寶ノ二佛ト云モ用ノ佛ナリ。妙法蓮華經ヨソ本佛ニテハ御座シ候へ。經ニ如來祕密神通之力トハ云レナリ。如來祕密ハ體ノ三身ニシテ本佛ナリ。神通之力ハ用ノ三身ニシテ迹佛ゾカシ(諸法實相抄)

此聖判は本地難思の境智の妙法體が。化他の用を施す時難思冥合の不離の體を假りに暫らく兩立せしめて釋尊は。冥合體中の壽命海を表し多寶尊は冥合體中の法性海を表して此二者但一個の寶塔中に『ウナヅキ』合ひたるは則ち冥合の不可思議を表したる故。釋迦多寶の二佛といふも用の佛なり妙法蓮華經こそ本佛なりとの解決にあらずや

然るにこの明快の聖判を嫌ふの餘り。本抄を台家附順といふものあれど。本尊抄の『其本尊爲體妙法蓮華經、左右釋迦牟尼佛多寶佛』なりといふ中央妙法。左右釋迦多寶にして。中尊の妙法を表現する爲に。互に一方面宛を示したるが二佛なり。一塔中に二佛ウナヅキたるは此極意を示したるものなれば。畢竟兩抄同一意味なり。故に前者を輕視すれば後者をも同一視せざるべからず。進退谷まるの見解といふべし。又

聖判云生死ノ二法ハ一心ノ妙用ナリ。有無ノ二道ハ本覺ノ眞徳ナリ。(中略)釋迦多寶ノ二佛モ生死ノ二法ナリ。

この聖判亦實相抄に同様の趣きあり。二佛は一心本覺の妙用にして。法は體。佛は用なりとの證明なり。

本尊の本體を講說すること大略是の如し。佛意祖訓眷々服膺す

べきなり

次釋迦多寶二佛者。先迹門意者。二佛居一塔。境智不二之形。分身坐樹下者。利益周遍之相。三佛三身之表徳。迹佛果成之質也。

これは追善に捧げたる本尊の中の釋迦多寶二佛の事を説明せるなり。初一句は標。次の全文は釋なり。標には二佛といひ。釋の方には三佛といふ。合はざるが如し。最も奉安する所の御本尊は。二佛で分身佛は現はしてないが。其義としては三佛あるなり。寶塔品已前は分身佛が居らないが。其已後には居ること勿論である。由て書顯の有無に拘らず。必然として三佛在ますなり。されば本尊抄に其本尊爲體と説明する時。分身佛を擧げたり。されば幾多

三佛トハ釋迦。多寶。分身。

の書顯の本尊中に分身佛已下諸尊の存略不同なるも其實質は全く同一體なりと知るべし。『先迹門意者』といふは。次に本門の意を述るに對す。而して本尊を説明することは本門にある故。茲に迹門を講明するの必要なきが如しと雖。傍意として。助成の爲に。迹門を述べて本門を光顯するなり。而して寶塔品の時釋迦多寶の二佛が塔中にあり。分身も來集したる故。實際上三佛が在ますことを記憶すべきなり。

『二佛居一塔』とは多寶は境。釋迦は智を表して。此境智の二つは全く不二冥合して居ることを示す爲に。二佛が一塔に在ますといふ。故に結て『迹佛果成之質』といふ。果成の二字を以て其義を知るべし。質とは形式をいふなり。『分身坐樹下』とは樹は寶樹なり。寶塔品の時は寶樹の下に拵へたる座に分身佛が在した故にか

くいふ。これ衆生を利益する處の應身の有様を示したるものなり。本經に『或示己身或示他身』と説くものは。普く萬機を攝する相好を示したもので。今の句は其意味を形に現はしたことになる。多寶は境を表する故に法身なり。釋迦は智を表する故に報身なり。分身は用を表する故に應身に當るものと知るべし。

文句八云法身無來無出。報身巍巍堂々。應身普應一切。若即謂是三佛未盡其體也。唯是表示而已。多寶表法身。釋迦表報身。分身表應佛。雖三而不二異。

これは三佛を三身に配當す。法身は來出するなく。遍滿法界の故に行くも去るもあるべきはずなし。多寶は乃ちこれを表示す。又報身は巍巍堂々とは。威嚴堂々として犯すべからずといふ。勿勿吾人凡夫の知見想像し得らるべきにあらず。決して塔中の一

半に安居するといふ如きものでない。應身の全體は普く一切に應現するといふ。然れば何ぞ僅の三千三百萬億國土の樹下に座することを得ん。故に三佛といはば皆其全體を盡さざる失あり。唯これ表示耳である。多寶は法身のヒナガタを釋迦は報身のヒナガタを。互に其一分宛を表示したのである。而も三者同一所に集會したるは。三身即一を標榜し。同一所にあれども混亂せず。整然とましますは一身即三身を表示して。圓融自在の妙徳を現はしたるのなり。何故多寶を境に配するかといふに

妙樂云多寶久滅今出證經生不生也。往昔滅度猶現全身滅非滅也。既非生滅常住而不遷可表法身。釋迦入塔一身相稱如智稱境故可表報。分身表應文理自成。如境智相冥故能起應。久滅度の多寶が。出現して皆是眞實と證明したが。此久滅は非

生現生を示す。往昔滅した佛が今日全身を現はしたるは。これ非滅現滅を示すなり。此二つから常住不變なる法身を表することになる。釋迦を報身の表示といふは。釋迦が後に塔に入る。元は多寶一人なり。これは法身理體一の處へ。報身智が冥合したことを表した。始成正覺の有様を示されしものなり。分身を應身とするは道理文證自ら成立する其故は。境智合一すれば。無論應が現はる。應は智の用らき體の用らきなり。兩者冥合せずば何れの用らきも出て來ない。此故に境智二者の説明が畢れば。自ら法爾として其理由を解了することになるぞとの意味なり。

『迹佛果成之質』とは始成釋尊の三身の徳を成就したる處を指す。迹門は果上には三身具足すれども。因分を論ずれば修二性一として。性徳本具は但法身の性のみ。報應二身の因は修行に依て成す。無